

俳句雜誌

令和五年八月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六卷第八号

# 水 明

2023 8月号



《今月のかな女》

母歩く庭と思ひぬ盆の月

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

昭和二年の初秋に詠んだ句であるが、同年二月にかな女の母が亡くなっている。盂蘭盆の夜、月を仰ぎ見つつ庭に佇むかな女。生前の母はこの庭が好きで、晩年は庭を歩くことを日課にしていた。去年は母と一緒にこの庭で盆の月を眺めていたことを思い出おこし、今でも母が身近に居るような気がしている。盆の月が、母のように自分に語りかけているように思えてくる。

(鬼之介・註)

# 水 明

第1115号

— 華の一句 —

夏めくやロツクライブへ向かふ古希

綿引まりこ

衣類を軽々とした夏物に更衣し、家のカーテンや敷物などの調度品も夏用に替えた五月。自分の気持も夏ばつと夏向きに切り替えた。某日身近にいる若者からロツクライブに誘われ、不安と期待の入り交じる心境でライブ会場へ向かう。身につける衣服や靴、そして、化粧から髪型まで、その場の雰囲気合うよう指導されたのか。五十年も若返った気分  
でライブを楽しんだ。(鬼之介・推薦)

# 水 明

令和 5 年  
8 月 号

今月のかな女

華の一句

紹のひと(作品)

紅 薔 薇(近詠)

サバンの砦岩(近詠)

風 琴 雪欄作家近詠鑑賞

ゆ ず り 葉 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

☆新珠賞受賞者ノオト

○自選二十句

父のライカ

山本鬼之介

由良ゆら女

網野月を

町野広子

檜鼻ことは

波多野寿子 星野和葉

茂木和子 ほか

松井由紀子 大場順子

梅澤佐江 ほか

檜鼻ことは 笹本啓子

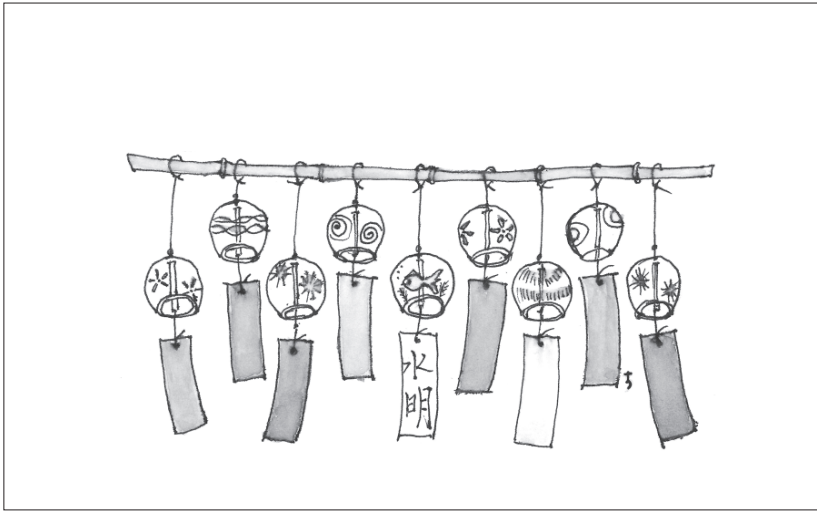
青木鶴城 ほか

山下久代

網野月を

霜多光代

渋谷きいち



○自選二十句

（俳句は鏡、何を映すか）

七月号の巻頭句

小林京子  
網野月を

水明集

菅原卓郎  
菅原真理

梅澤輝翠  
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟（水明集六月号鑑賞）

池田雅夫

鼓笛集（同人作品）・私の一句

染谷風子

俳誌望見

曲淵徹雄

山紫集

70・

句集喝采

68

水明例会報・各地句会報

62

水明ホームページご案内

61

りんどう忌・水明塾のお知らせ

58

風声・発展基金御礼

56

後記

52

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

---

---

# 紹のひと

山本鬼之介

気 後 れ の 吾 を 励 ま す 青 蛙

た め ら は ず 蟻 の ぼ り ゆ く 御 神 木

虫 干 や 柳 行 李 の 使 ひ 道

---

麗しき翠巒迫る秘湯かな

俳号はまさに二つ名夏あざみ

誰を待つやら三条小橋紹を召して

命あるごとく消えゆく二重虹

また一つ勇気をくるる大夕焼

# 紅 薔 薇

由 良 ゆら女

川 底 の 闇 に 駅 あり 薔 薇 の 苑  
絵 の 具 盛 り ナ イ フ で 削 り 花 茨  
繚 乱 の 薔 薇 に 定 め の 見 え 初 め て  
香 を 嗅 ぐ や 体 内 め ぐる 薔 薇 の 紅  
薔 薇 ジ ャ ム の 紅 茶 ほ の ぼ の 読 む 手 紙  
熱 こ も る ロ ン グ ド レ ス を 衣 紋 竹  
紅 薔 薇 の 渦 め くる め く 夢 の 中

四月に体調をくずして入院、血液関係の病とのことで原因は不明、治療方針も立たない。いずれにしてもすべてを諾うほかはなさそうだ。せめて赤く美しいものと薔薇に会いに出掛けた。戴冠式かと思うバラの名前に囲まれて一花一花大自然の造形の何んと美しいことか。バラジャムの紅茶で一服、五月晴の中心身共に薔薇に同化した気分。  
総ての生あるものそして今ある己の命の愛しさを一際思う一日であった。



# サバンナの砦

## 網野月を

泥水に野牛の群や犬猿稗  
白獅子の昼寝むさぼる偽平和  
伝説の怪鯉の鱗夕立晴  
大夕焼闘人長槍に凭れをり  
砦頂より地の果て睨む晚霞の鷹  
石となるMOBY DICKを旱星に  
赤龍の透く眼光にたぢろぐ

「…想望俳句」という構え（提唱）は如何なるものであろうか。八十年前のそれは戦中という社会的背景もあって、批判と評価の谷底にあった観がある。一方で、主宰の提唱される「虚の俳句」という構えは、「想望」の延長線上にあつてより実作に近待している感がある。サバンナ（フィールド）ということの出来るところへ筆者は、旅したことがある。なので完全な意味で「想望」にはならないのだが。「怪鯉」「MOBY DICK」は「想望」を超えて「空想」の域に入らさう。季語「佐保姫」「蟪蛄」などと語質が酷似している。ところで余談であるが、今年の交流戦はどの球場（フィールド）も白熱しているようである。

# 風 琴

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野 広子

◇花ミモザ (五月号)

鈴木康世

◇藤棚 (五月号)

菊池ひろこ

教会の小さな十字架風光る  
廃園のマリアの台座春埃

健康の為の散歩を日課とされている作者。ある日、少し足を伸ばしてみると、確か以前そこにあつた教会と、幼児園が見当らない。閉ざされた教会には小さな十字架が、マリア像も台座だけが残されている。「移転しました」の立て看板に三年近い歳月を感じた。

園庭に差す日やはらか花ミモザ  
空耳か蝶追ふ児らの声を聞く

三年程前に通り掛つた時、それは見事なミモザに出会えた。今回もそれを目指して来た。教会と幼稚園は移転していたがそこには更に大きく溢れんばかりのミモザが咲き、例えようのない黄色が目と心に沁みる。嘗てそこに居た子供達が蝶を追う楽しい声を聞いた気がして、作者は暫し佇む。

立て看板の文字の薄れや草青む

移転を知らせる看板は、いつ頃建てられたのか。その文字も薄れかけている。考えてみれば、此処へ来たのも三年振りかも知れない。中七下五に歳月の経過と作者の驚きや寂しさを覚える。肩の力の抜けた御句に学ばせて戴く。

家長不在二階へとどく藤の棚  
留守まもる男子幼年藤の雨  
弟に禁止事項や藤咲く樹

嘗て作者が住んでいた和洋折衷の家。その洋の部分には、戦後進駐軍将校の家族が住む。和の部分に住む家主一家であつた作者は、多くの経験をされたに違いない。一句目の家長とは父上の事であろう。藤は二階へと届く迄に成長する。

二句目幼い弟を詠む。幼いながらも彼は、母や姉を自分が守らねばと思つていたはず。そうは言つても、やんちゃ盛り  
の男子の事、お母様は色々と心配りをされたに違いない。その折々を藤の木は見知つていたのである。

祖母を撮るアングルさがす藤の昼  
夕藤や陽のあたりある防空壕

三世代で住まわれ、お婆様を藤の前で撮らんとする昼下り「アングル探す」に、愛情溢れるこ一家が伺える。防空壕はご自宅の庭に掘られていたのである。家族の為に父が掘つたのかも知れない。そこは戦後になつても未だそのままに置かれていた。夕陽のあたるその場所は、何だか物悲しい。作者がお会いする度、物怖じしない大らかさを感じていたのだが、納得した思ひである。

◇筆竜胆 (六月号)

石山かつ子

正門に国旗掲ぐる松の花

行く先を決めず乗った電車で着いたのは日光。人の流れに従いバスに乗り、多くの人と共に途中下車。そこは国の重要文化財「田母沢記念会館」。この御用邸は江戸、明治、大正の建物が調和され、先ずは正門の国旗が目に入る。手入れの行き届いた松の木も花盛り。

残花 飛花菊の御紋の釘隠  
御用邸に五葉躑躅の白大樹  
御用邸を守る土塁や筆竜胆

年よって桜は早かったり遅かったり「残花飛花」の状態の中を訪れたそこには、門柱等建物の釘隠に菊の御紋が使用され感銘。庭園の中心となる白い五葉躑躅の大樹は、人々の目を奪う。他にも石楠花や山躑躅も今を盛りと咲いていた。又、邸を守る為に盛られた土塁にも遙かな歴史を感じ、自然豊かな日光なればこそその旅を堪能し、身心をリフレッシュ。筆竜胆が素朴で味わい深い。

夕映えの風撫まんと麦は黄に

帰路の車窓からの風景か。それとも、ご自宅辺りの風景なのかも知れない。まるで一枚の絵を見ているように、景色を思い描く事が出来る。「何か切つ掛けを掴みたくて」と一人旅に出た作者の向上心と、行動力に只々敬服。

◇上野徜徉 (六月号)

境 延昭

逃水や動物園が真正面  
竊ぐもり殉死の墓に鎮の門

上野をぶらぶら歩く。春の強い日差しの下蜃気楼のような現象が起こる。中七下五の言い回しが爽快。余計な言葉はいらない。一本道を入ると喧騒から遠のく。塔頭の並ぶ一角に「殉死の墓」がある。主である家光を追って、複数の家臣が殉死を遂げたと思われるが、実は衆道(男色)の絆の証であつたらしい。今も昔も人の世は多様であり、それも又、自然な事と認めたい。鍵を借りて墓苑に入れる事も驚きである。多様な人の世を「竊ぐもり」が言い得ている。

アメ横は国籍不詳春の蠅  
広小路の寄席に列なす目借時  
夏近し恐竜展に豆博士

上野は不思議な街である。武士の墓あり、外国人の多いアメ横、寛永寺等々。商店からの呼び声や種々の言語が飛び交う。此処には大人の姿を思い浮かべる。次に広小路の寄席辺りでは、老若男女が列を作っているが若い女性の多い事にも気付く。次、博物館の恐竜展には、親子連れが目立つ。此処へ来る子供達は、大人顔負けの知識を持ち、話し出すと止まらず、あの憧れの恐竜の骨を、その大きさを目を輝かせて見学するのである。実物の巨大な骨格を目にした子供達は、益々恐竜にのめり込むのである。豆博士とは正に、言い易て妙。

どの御句に於ても季語が動かず、只々敬服。

# ゆずり葉

◆季音六月

檜 鼻 ことは

今月号より「季音月評」を担当することになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。タイトルはご自由にと伺ひ、さてどうしたものかと思案の結果、「ゆずり葉」とすることにいたしました。

五月の末、水明俳句会のご一行が若狭にお越しの折、案内しました若狭の古刹 桐山明通寺。大同元年、坂上田村麻呂公が本寺を創建した際、山中にあった桐（ゆずり）の大木から、薬師如来、降三世明王、深沙大将の三体の像を彫り、本堂に安置しました。桐山の山号を体現するように境内の此処彼処に、ゆずりの木が育ち葉を繁らせています。

ゆずり葉は、新葉が出てから古い葉が落ちるので、新旧相ゆずるといふ縁起を祝ひ、新年の飾り物に使われることもあるようです。

落味噌やお焦げでつくる握り飯 石井喜恵

食べ物の句は美味しそうに詠むにかぎる。落味噌は春先の楽しみ。ほのかな苦味が何ともたまらない。苦味は、人が味

わうことのできる基本的な味（甘味、塩味、酸味、苦味、うま味）のひとつ。本来、毒のあるものを示す味として認識されるため、甘味や塩味と比べると、約千倍もその味を感じやすくなっているのだそう。それゆえ、子どもの頃は敬遠しがちな苦味だが、苦味を口にする経験を重ねると、いつしか苦味は美味しさになる。

落味噌のおにぎり、しかもお焦げとあつては、これはもう姿勢を正していただくしかあるまい。

春眠を貪る猫の寝言かな 森本早苗

愛猫家にとって、滑らかでふわふわした毛、プルンとしたやわらかい肉球、人懐こい眼、のんびりとした表情、その全てが可愛いのだろう。春の陽だまりに微睡むように眠っている猫の姿は本当に幸せそう。「寝言かな」の措辞に、作者の猫への愛情を感じてしまう。

いつの頃からか、貪るように眠ることが出来なくなってきました。早起きと言えば聞こえがよいけれど、疲れていても

目が覚める。春のぬくもりの中でうつらうつらとはするのだけれど、深い眠りには至らない。掲句の猫のように、寝言を言いながら春眠を貪りたいものだ。

菜の花や瞼の重きバス旅行 松井由紀子

後ろの席が好きな人。前の席が好きな人。話するのが好きな人。窓から見える景色を楽しむのが好きな人。早速に缶ビールの蓋を開ける人。観光バスの旅は、同じ行程を辿りながら、人それぞれの旅の楽しみ方があって面白い。「菜の花や」が、春のぬくもりと明るい陽射し、久しぶりの遠出を楽しむ作者の気持ちを伝えてくれるよう。目的地まではもうしばらくかかりそう。ガイドさんの巧みな話術がいい子守唄になって、うつらうつら。これもまたバス旅行ならではの楽しみなのだ。

この日より妻は戻らず四月馬鹿 正木萬蝶

よく聞いている朝のラジオ番組で、パーソナリティのお一人が「俺も金魚を飼っていたことがあるんだけどさあ。俺が旅に出ている間に嫁さんが出て行ってしまっただよ。おまけに金魚が死んでいたんだよ。それで、二重の悲しみで金魚を埋めたことがあるんだよ」と話していた。

その数日後に、この句を目にしたものだから、どきりとし

てしまったのだが、下五の「四月馬鹿」に救われた思い。しかしながら、本当のところはどうなのだろうと思わぬでもないが、武者小路実篤曰く「仲よき事は美しくしき哉」。

神苑に名残りの花の降るばかり 日高道を

平安神宮の神苑であろうか。春は桜、夏は杜若、秋は紅葉、冬は雪、四季折々の自然の営みに触れることができる。京都には桜の名所が多く、神苑は、谷崎潤一郎の「細雪」にも登場する紅枝垂桜が美しい。

咲き始め、満開の頃の桜は言うまでもないが、花時を過ぎた時期に、名残の桜に出会うと心が救われたような思いになる。「名残りの花の降るばかり」の措辞のなんと美しいことか。

父の背のかすかな記憶かざぐるま 飛永 鼓

小津安二郎監督作品の中で好きな映画はと問われたら「晩春」と答えるだろう。本作に限らず小津の映画は父と娘をテーマにした作品が多い。若い頃、中年の頃と繰り返し観てきた映画だが、この歳になって本作を観ると、笠智衆が演じる父親、原節子が演じる娘の立ち居振る舞い、言葉の一つ一つに、しみりと心がほだされる。掲句を読み、何故かもう一度「晩春」を観たくなってしまった。下五の風車、懐かしい景色を思い起こさせるような季語の斡旋である。

# 季音雪



ラベンダー  
波多野 寿子

穏やかな医師の問診白薔薇  
神の宮亭々として夏木立  
外へ誘ふ吾娘の声する青葉風  
木苺や過ぎ去りし日をいとほしむ  
香を運ぶ風にすらりとラベンダー

メール 星野和葉

メール打つ「今守宮はりついています」  
白靴を買って旅程と気象予報  
真つ新たな白靴真つ直ぐ前向きで  
青とかげ再生の尾の寸足らず  
小気味よきホテルの庭の瑠璃蜥蜴

伏し目 茂木和子

夏 至 矢作水尾

菟蓐の花見し夜の尾毘骨  
社交辞令も少し上手に額の花  
落日の郭公捉ふるカメラの目  
郭公啼くや伏し目がちなるマリア像  
黒南風や黄花騒立つ日もすがら

山鳩の声透き通る夏至のひる  
紫陽花が己の色に決まる庭  
呼ぶやうに応ふるやうに雨蛙  
すこやかな余命いざなふ菖蒲の湯  
祠立つ荒磯の岩や夏近し

恋 蛍 森本早苗

爪の色 山中みどり

明滅はワルツのリズム恋蛍  
困ふ手に蛍の動悸闇深し  
梅雨晴間千載一遇こふのとり  
竹藪に野仏在はす青田風  
青鳶のすつぱり絡む水車小屋

咲き朽ちし紫陽花を剪る花鋏  
短夜やガーネット色の足の爪  
粗挽きのコーヒーの香よ明け易き  
揺れ止る振子時計や梅雨に入る  
駒形の川蟹江戸つ子の面構へ

経を唱ふ 柚木治子

新宿御苑界限 網野月を

ライトアップの洋館浮かす紅薔薇  
窓際の母似の女梅雨の月  
蟻の門渡り経のリズムの難かしき  
黒日傘クレオパトラに似し目化粧  
流身をさらし神さぶ作り滝

入口が出口ともなり六月来  
入り口の内に傘置はしり梅雨  
百頭のパンダの傘やはしり梅雨  
泰山木の百花の咲きて雨に香かき  
蠟梅の姉妹のごとく実りけり

落し文 由良 ゆら女

六 月 石井喜恵

櫟から風の便りの落し文  
密書めく忍者の里の落し文  
拾はねば後ろ髪引く落し文  
口遊むまたも蕪村や五月雨るる  
砂の城汀にくづれ梅雨の月

ガードマン立つ六月の宝石店  
非常線張る六月のぬかり道  
隠沼に水の匂ひや栗の花  
放牛のかすかに匂ふ夏薊  
曖昧な約束重し栗の花



いみじくも

石山 かつ子

手塩 皿

大村 節代

豆御飯自我の主張を反抗期  
蚊遣豚睦言聴いてゐたりけり  
いみじくもへぎに盛られて焼岩魚  
この先は二人にまかす蚩狩  
板一枚決着つかぬ水喧嘩

窯出しの素焼の德利花菖蒲  
乾杯のグラスに映る七変化  
夏料理引き立ててゐる藍の磁器  
夏料理片隅に置く手塩皿  
閑古鳥気取つて歩く露地草履

ペーロン

大橋 廸代

何だ彼だ

小倉 倭子

四艘に御座船牽かれ葎雀  
ペーロンや風をきり裂く櫂さばき  
競漕の太鼓うはずり行々子  
御座船に時明りして行々子  
梅雨巨船あさぎの煙を吐きて発つ

滅亡の村に人魂蚩合戦  
妄想の淵に落ち入り蚩見舟  
可惜夜の椿山荘の蚩狩  
甘辛のなんだかんだと冷し酒  
決断の緩むひと口ところてん

枇 杷 栢 尾 さく子

みすゞ刈る 五 明 昇

落涙の訳は不問に梅雨寒し  
晩年の師の句なつかし枇杷を手に  
青松虫公社の囲ひ高すぎる  
蚊を叩き手のひら一日中痛し  
残生に願ひごとあり雲の峰

山青葉「右ぜんくわうじ左いせ」  
天守の統ぶる四方の山脈滴れり  
「信濃の国」草笛で吹く老ガイド  
古戦場に魂の数ほど夕蜩  
さらば穂高よ夏帽を振る河童橋

飛 魚 菊 池 ひろこ

化石のやうな 境 延 昭

飛魚の軌跡見てゐる数学者  
海の青飛魚の碧陽は真上  
今年また梅の古木の五月雨るる  
銃後とて開墾せし地芝青し  
泉湧く宙に触れ合ふ翅と翅

守宮鳴く窓に化石のやうな貌  
草笛や若き農夫が妻を呼ぶ  
女盛りをやもめで徹とほし鉄線花  
初松魚尾鷺は雨の通り路  
蜩狩ふたりが嵌る落し穴

麦の秋 椎野美代子

麦の秋壺中の天をまきこみて  
庭に蛇あつと臙なまくらや  
窓に守宮コップの水が苦くなる  
麦秋や縄文系の漢彼  
厚き掌の握手は熱し麦の秋

柏餅 島津初花

柏餅年に一度や郷の味  
大木の葉を弄ぶ青嵐  
青嵐五湖は五色のフルコース  
別の木に人へと渡る青嵐  
葛餅の餡透きとほる「雲城水」

蔓橋 鈴木康世

艶を増す網代天井緑さす  
出土土器のおしやべりを聴く夏至夕べ  
青葉風に背押され渡る蔓橋  
今生の旅もそろそろ七変化  
このあとの未知の齢や心太

神戸初夏 田寺玲子

街中サンバ初夏の神戸を席卷す  
無住寺の闇ふくらませ初夏  
葎切や舟へ敷き込む小座布団  
十一や馬柵に干さるる作業服  
虹二重ハーブに触れし指匂ふ

葎切 十倉和子

青梅 永野史代

復活の嫁入り舟や葎雀  
葎切や耳傾くる千体仏  
敗将の城址は水漬き行々子  
鳴き過ぎて口中真つ赤行々子  
行々子薄暮の湖心かがやかす

白薔薇を抱きし胸のつめたかりけり  
ドーベルマンとゆつくり入る薔薇の門  
宿坊は擬きづくしの夏料理  
梅は実に父方すでに疎遠なり  
乳房喪失姉黙々と青梅選る

里景色 鳥羽和風

夏館 西山貴美子

青田波一両電車の走りつぶり  
鈴蘭や指一本で弾くピアノ  
一時を闇に身を入れ花火かな  
若竹や羽二重餅は粉まみれ  
青あらし送電線が笛を吹く

広告塔の空が一閃夏の雲  
カーテンにたてよこの風鰯雲  
月見草山から父が下りてくる  
やや深き辞儀して集ふ夏館  
お忍びの膝つめたくて月見草

# 季音月

雨中花

松井由紀子

雨二日ほたほたと積む柿の花  
 相傘のしばし佇む濃紫陽花  
 雨あがり山辺の百合に会ひにゆく  
 梔子の花を雨夜の客とせむ  
 幾筋もの雨の向かうの花菖蒲

父の日

大場順子

同居して表札ふたつ風薫る  
 石塀に太古の影を曳く守宮  
 身の内に聖女と悪女クレマチス  
 敦盛へ参る青葉の雨しづく  
 父の日の社員父なる顔ばかり

うたかた

梅澤佐江

繫ぎあふ手のうたかたや蛍狩  
 水の香を纏ふ黒髪螢舟  
 つばめ魚遠流の鳥を恋ひて飛び  
 青蛙日照雨やさしき午後となり  
 竹皮を脱ぎ琅玕の穂の澄めり

三尺寢

井上燈女

袈裟がけに来る夕立の早さかな  
 仏顔となりて農夫の三尺寢  
 ラムネ玉一口づつを鳴らし飲む  
 栗の花うつうつ夜の匂ひ濃し  
 栗の花垂れて重たき夜を匂ふ

麦の秋

内田恵子

飛石の行方の見え花擬宝珠  
 麦畑サタンは尻尾隠しをり  
 黒南風や鮮やかな黄の勝負服  
 肩の力抜けよ少年蔦青葉  
 麦の秋見え隠れする車椅子

古書店 町野 広子

古書店の間口北向き麦の秋  
免許返納確と決意の緑雨中  
夏の雨手心といふ謀  
四センチ縮むわが丈花ぎぼし  
薔薇園に着て行くならば白か黒

お持て成し 正木 萬蝶

白亜紀や海を選びしつばめ魚  
葉隠れの対馬山猫青葉騷  
夏の夕皿鉢料理で持て成され  
実梅の香灰と妻の座は確と  
君に問ふ青葉の宿の夜に泣くを

万 緑 丸山 マスミ

画布はまだ手付かずのまま麦の秋  
片蔭を姉に譲りて銀座の歩  
自若たる楠の風格梅雨夕焼  
万緑の新東名を水明旗  
お香水を戴く社青時雨

薫 風 高島 寛治

薫風に法堂窓を開け放つ  
行く道は真一文字に麦の秋  
飴玉に以心伝心蟻の群れ  
梅雨深し思ひ切り良く赤のシャツ  
予報士の齒切れの悪さ走り梅雨

蟻 松宮 保人

早苗田の水の加減を二度三度  
細波や植田鏡に空の雲  
木洩れ日や古寺に際立つ苔の花  
引き返し中にはありや蟻の列  
蟻の引くパンの欠片や四阿の昼

茫 茫と 池田 雅夫

夏山の頂上の碑をめざしゆく  
茫茫と揺らめく大地日の盛り  
規格外のおばけ胡瓜や道の駅  
内緒ごとと団扇にかくす鼻と口  
雲の峰竜の鱗の落ちて来ぬ

涼み茶屋 渡辺 舍人

社長らは向かうの座敷涼み茶屋  
鉄線のおもんばかりて二三輪  
追熟の旨寝たまねぎ吊されて  
月下美人瓶酒に彩香閉ぢ籠むる  
水無月の水を背に分け川の鯉

水無月 荒井 俱子

鱧釣や羽田はかつて漁師町  
I S S と交信したき蝸牛  
川縁の闇のかたさや初螢  
人影の絶えし茅の輪に夕陽濃し  
襖終へ甘味処へいそいそと

梅ジュース 福田 千春

小さき手に包まれ実梅熟しさう  
やさしさは青梅を拭くたなごころ  
薔薇盗人恩情受けて咎軽し  
震度一花卉はらりと夜の薔薇  
故郷の海よ光よ飛魚食めば

螢 狩 森川 義子

懐かしき唱歌を声に螢狩  
満席のフルーツパーラー夏の夕  
起重機の伸びきつてゐる夏至の夕  
菩提寺の忌日の香に梅雨の蝶  
商ひの声軽やかに梅雨晴間

花ミモザ 松本 光子

見納めの生家は更地花ミモザ  
立て札に潤む眼や花ミモザ  
花供へ墓に蜥蜴の尾を残し  
夏館 噂 の 老 女 長 袂  
十葉の真白き八重の匂ひ良し

風薫る 井上 玲子

渓谷をまたぐ吊橋風薫る  
満身に樹海の息吹風薫る  
修善寺の丹の橋けぶる五月雨  
時の日の時穏やかに嵯峨野ゆく  
地底湖は神の存念泉湧く

青き芝 山田美佐尾

青芝やホテルの庭の白き椅子  
舞ふやうなピッチャーの技青き芝  
青芝を人激走し三塁へ  
追加点決むる白球青芝へ  
青芝やゴルフボールの天を割く

歩幅 松山清子

転院を告げられ仰ぐ梅雨の木々  
遅くとも私の歩幅青田風  
海見えて走り出す子の夏帽子  
大甕の蓮の花咲く古利かな  
青柿や少年のふるバットの音

模型船 川崎道子

黒南風や出航を待つ模型船  
逃亡者潜んでゐさう木下閣  
まくなぎを追ひ払ひつつ通夜の客  
板長の高下駄の音梅雨湿り  
見学のガラス工房梅雨夕焼

夏の山 上戸千津子

大橋の撓る曲線夏嵐  
ジャズ・サンバ神戸祭りの風物詩  
早苗田の織りなす棚田立体美  
谷川の音が励ます夏の山  
マスク取れ話の尽きぬ夏座敷

ウインカー 近藤徹平

ウインカーの弾きものは大夕立  
名優の睨み決め込み墓  
川べりの宇宙遊泳蛍狩  
沖繩忌摩文仁の丘の埼玉碑  
七変化主演女優の妖しき目

夏の山 大塚茂子

ぐいと漕ぐ触るる潮来の花菖蒲  
畳なはる夏山ぐるり三方五湖  
田を植えてだるまのやうな夕日かな  
お揃ひの白靴双子連弾す  
星川に時惜しむかに立葵



ハト時計

熊倉 千重子

川に沿ふ湯宿の灯りさみだるる  
時の日や体内時計リズム良く  
時の日や鳴くよ茶房の鳩時計  
滝の前憂きこと徐々に消えゆけり  
短夜や未完の一句如何にせむ

パナマ帽

野口 和子

水無月やカフェ開店の灯のともる  
どくだみで仕込む虫除け琥珀色  
パナマ帽マフィアさながら老紳士  
足火照る下駄の疲れや藍浴衣  
枝付きの枇杷の重たき甘さかな

合歓の花

西浦 千枝子

六文銭の幟はたはた牡丹寺  
合歓の花救世観音の道標  
栗の花鼻をつまみて登校児  
夏水仙愛づる椅子あり村はづれ  
公園に木の椅子増えて夏に入る

最近の名句集を探る

座談会

司会 筑紫磐井

秦 夕美 『雲』

大西 朋

千葉皓史 『家族』

北大路翼

山西雅子 『雨滴』

駒木根淳子

南伸坊アトリエ訪問

巻頭三句

奉好評連載

柿本多映

成瀬政博  
とりあえずの日々

仁平 勝

筑紫磐井  
俳壇観測

堀田季何

坂口昌弘  
忘れ得ぬ俳人と秀句

白岩敏秀

青木亮人  
句の手触り、俳人の響き

朝妻 力

大西 朋

西池みどり

俳句へのまなざし

掘切克洋

神作研一  
てのひらの江戸

宮本佳世乃

藤村公洋  
古典籍を旅する

西山ゆりこ

俳句のつみみ

石川美南

二ノ宮一雄  
一望百里

● 俳句と短歌の10作競詠

● 人と作品 二川茂徳 『牛歩』



Haiku Shiki

2023年9月号

8月20日発売  
定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 季音花

山莊美術館

檜鼻 ことは

夏来る 天王山の登り口

山莊の風のテラスや夏帽子

桜桃や針の動かぬ古時計

薫風や陽だまりに寝る猫二匹

夏めくやモディリアーニの長き首

茅の輪

笹本 啓子

蝸牛見てホルンの音色蘇る

萍をまとい田舟の押し出せり

沈黙の萍沼の主となり

鳥の長潜る茅の輪の歪なる

滴りの暗きに在す石仏

生き様

青木 鶴城

梅雨寒や世は楽しきことばかり

飛魚や己が進路に一直線

清濁の水の流れや仏法僧

煙突の送りの煙百日紅

周年の忌日の誦経喜雨真昼

夏料理

日高道を

静かなり終の住処の深緑

マロニエの花を見ると消ゆる空

畦道を走る人あり喜雨来る

板長の手際の良さも夏料理

見送りは祇園の雨や夏料理

わが夜

河野 はるみ

すれ違ふ故里なまり閑古鳥

草木の葉音幽かに夕南風

雨の夜をわが世と鳴くや雨蛙

夜を恋へば酒も大好き雨蛙

月夜には月夜のかをり南風

熱

石田慶子

飛魚はね似たやうな雲湧いて跳ね  
朝涼や「歩いてます」とライン来る  
ひとしきり講釈聞きて薔薇一輪  
母さん似父さん似かな鴉の子  
「坊」と呼ぶ大叔父の声夏座敷

二重虹

野田静香

梅雨ぐもり気怠き巫女の社務所かな  
馬車道の外灯烟り夏の霧  
相席の旅人と見る二重虹  
翡翠や目覚むれば夢消え去りぬ  
夢に出よ会ひたき友の星涼し

苔の花

飛永鼓

すずらの香に埋めらるる程の恋  
青年は一つ大人に青嵐  
ワルツ聴きジャズを聴く日や苔の花  
苔の花見ざる聞かざる我慢して  
膝頭摩りて見上ぐる送り梅雨

蟻の行方

曲淵徹雄

飛魚に鞭打つごとく波頭  
ふる里の山並蒼し草の笛  
青葉風へ投げ込む赤きフリスピー  
滝壺にあがき離れぬ塵芥  
一匹の蟻の行方を追ふ幼

ライン下り

保坂翔太

夏めくやライン下りの大しぶき  
新卒の教師はつらつ柿若葉  
安住の半農半漁初鰹  
井戸水を注ぐ水差し夏館  
古民家に座敷わらしと守宮かな

あぢさゐ

中野疆

梅雨入りよ雨の名曲はじまりぬ  
植木師の深き空より梅をもぐ  
あぢさゐを積み上げ寺となりけり  
紅あぢさゐ友の悲報を伝へ聞く  
万緑よフラミング型の杖もち

父のこと 石川理恵

裾分けのさらに裾分けさくらんぼ  
用水は速さを増して桜桃忌  
父の日や母と語らふ父のこと  
入梅して文の書出し定まりぬ  
金の紙ひかうき吸はれ梅雨晴間

釣船 松島寛久

釣船の兄貴に蝶も遊び来る  
植田風匂作りの苦も雨花の路  
若竹に箒の石の音響く  
作務僧に箒を置けと旅の蝶  
燃ゆるかに花の魔性や蝶迷ふ

白靴 原田秀子

「ヨシノヤ」の白靴かろしコンサート  
ダンディな床屋の主白靴を  
空豆の鉄漿きりり一文字  
白葵飛行機雲を見上げ居り  
苗植機水面の雲をゆらしゆく

半夏生 下川光子

半夏生野川を亀の泳ぎきる  
かたつむり雨の匂を引きずりて  
守宮出て夜な夜な窓に影を置く  
麦秋や一日一個の茹で玉子  
高原の列車空へと麦の秋

紫陽花 田中章嘉

紫陽花をスマホに残す傘の人  
紫陽花に触るれば零す雨の水  
梅雨入りやポストの葉書しなやかに  
仕立物母は目疲れ明け易し  
短夜や悩み放れぬ老い心

父の日 横山君夫

父の日の遺愛の椅子を磨き上げ  
蟻走る山猫ストの記事の上  
放牛の百頭はるて青野行く  
立葵少女はすつと席ゆづる  
棟上げの槌音ひびく梅雨晴間

草 笛 染谷 風子

特上の鰻重を取れ父の日は  
かんかん帽兵児帯巻いて厩橋  
田植唄音頭取るのは土の声  
吾にもかつて紅顔ありき草の笛  
寝転びて草笛吹けば人恋し

青 芝 渋谷 きいち

昔この地に米軍キャンプ芝青し  
青芝に寝て地球に抱かれたる気分  
草刈機止めて聞こゆる「おーいお茶」  
練切の並ぶ和菓子屋山法師  
向日葵や塗替へさせぬ世界地図

薔 薇 鈴木 玲子

光射す黄薔薇に踊り子の名あり  
老優の語りシャンソソカフェに薔薇  
夏の夕青き尾長の横切りぬ  
子鴉のはぐれ門扉に人待ち顔  
宿坊に数多のリユック青簾

羽 拔 鶏 瀬戸 雄二郎

羽抜鶏唄れた一声アンコール  
老いてなほ強気崩さず羽抜鶏  
梅雨の川青草の上流れけり  
生涯にこんな日の有り梅雨晴間  
信号の赤の点滅 五月 闇

代 田 水 葛城 千世子

紫陽花や空を見上げて深呼吸吸  
紫陽花や鉢入るるをためらはれ  
スマホに五時五十五分夏の暁  
代田水流れを変ふる三人衆  
暁ほどのベニヤ板切り代田水

梅 雨 晴 間 宮崎 チアキ

玉響の日に透くる葉や梅雨晴間  
白々と明くる窓辺や五月雨  
五月雨にその名「常山木」といふ花よ  
父の日や今年も娘仏前に  
疎まれたるも十薬の花清らかなり

新樹光 後藤綾子

片蔭を一人じめして木のベンチ  
片蔭を踏み来る鳩の足赤き  
豊かなる石の裸婦像新樹光  
家解きて庭の新樹の浮きたちぬ  
揺り椅子にビール片手のレッズ戦

動く恐竜 野村美子

清流育ちの螢が三種ほたるがり  
水が自慢の婿の里から朴葉鮎  
時の日や動く恐竜イベント館  
萍や青紫の一日花  
水溜り白靴ひよいと飛び越ゆる

梅雨夕焼 高橋満耶子

クルーズ船は巨大マンション梅雨夕焼  
梅雨じめり帯状疱疹ふき出しぬ  
左目の痛みきりきり花石榴  
軟膏のかすむ目葉梅雨じめり  
空海や青葉まつりの神神し

特集 俳句にみる月の姿

特集対談 俳句、短歌、そして世界へ。

堀田季何・川野里子

巻頭作品10句

権 未知子・佐怒賀直美・高橋将夫  
名村早智子・行方克巳・成井恵子  
堀本裕樹・村上喜代子

俳壇

9月号

8月14日発売  
定価900円(税込)

巻頭エッセイ  
復本一郎

八木健造 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅲ期〕……………松尾隆信

連載

俳人の住む町：すずき巴里・島村 正  
俳句文法 そのが問題、そのがポイント：井上泰至  
名句のしくみと条件……………坂口昌弘  
俳書の森を歩む……………栗林 浩  
私の本棚・私の一冊……………坪内稔典  
十二か月添削教室……………前北かおる

俳句と随想12か月 井上論天・清水和代

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

# 『水明誌』

を繙く

(水明六月号)

山下久代

(「形象」編集長)

## 花万朶現の闇を繙すごと 曲淵徹雄

花万朶、多くの花のついた枝、その豊かな枝が「現の闇」を繙しているようだ。と作者は書く。「繙す」とは、「動物の生皮から不要なタンパク質や脂肪を取り除き、薬品で処理して、耐久性・耐熱性・柔軟性をもたせる」と、辞書にある。つまり皮を柔らかい革にすること。「繙す」ことによって、「現の闇」という抽象的な概念に質感が与えられる。そして満開の桜の枝々がしなやかに撓む様が浮かんでくる。自らの花の重みに加え、さらに風の力も加わっている。

満開の桜と闇、色の対比も映える。けれど、すべてが春のおぼろに包まれている。もしも「繙すごと」ではなく、「鞣している」と断定されたなら、このおぼろげな感覚から遠くなくなってしまうだろう。それゆえに「繙すごと」の「ごと」が示唆する意味も深い。花万朶をもつてしても、「現の闇」を昇華させることはかなわないからだ。「現の闇」は、なおも現前としてここにある。しかし、この闇があることによつて、花明りがいつそう美しくかやく。したがつて、「現の闇を繙すごと」とは、春の訪れるたびに永遠にくりかえされる美しい行為となるのだ。この現世において。

## 凍蝶を見しことのみ日記かな 後記朝香

「凍蝶を見しこと」、そのことのみが、その日の作者を物語る。しかも、その一日のことのみに限らない。その一日が作者の生きたすべての時間を象徴している。一瞬が永遠であり、永遠が一瞬であることの証だ。凍蝶を見た、その瞬間のみが切り取られ、その前のことも、その後のことも、日記には書かれてはいない。いま私は、凍蝶を見た、と書いた。だが、現代語で「凍蝶を見た」と書かれるより、古語の「見しこと」という表記の方が柔らかい響きをもたらす。さらに、「かな」という詠嘆も「見し」と呼応し、余韻をひいている。

また、この開かれた日記は、翅を展げた凍蝶の姿そのものでもある。この凍蝶が一冊の書物に匹敵するのだ。これもこの句の特徴である。凍蝶の体現している生と死、過去と未来。まるで、ひとり凍蝶のみが、この世界のすべてのことを作者に悟らせたかのような。凍蝶の見せた一瞬に、作者も瞬時に自らの過去と未来を重ねたのちがいない。もし仮に、この蝶が春の蝶であつたなら、世界のすべてを語り尽くすには至らなかつたであろう。句柄の大きさと句意の深さが相俟つて、俳句本来の強靱さを備える一句となつている。

# 現代俳句鑑賞

網野月を

ひたすらに緑うねるや捨て故郷

川名つぎお

〔現代俳句〕7月号・現代俳句の風より〕

座五の「捨て故郷」の強烈な印象がいつまでも心に残って消えることがない。「故郷」を出て久しい作者が、何年振りかで帰京するとそこには緑に覆われた「故郷」が横たわっているのだ。只々、「緑うねる」様に口のきけない作者を想像する。一度捨てたのであるからどのように荒廃しようと構うものではないのだが、そうは簡単には思いきれないのである。いくつもの感情が複雑に交錯する作品である。

栗鼠の尾も雫するなり青時雨

堀本裕樹

〔俳句四季〕6月号・巻頭句より〕

この栗鼠は青時雨に濡れそぼっても決して嫌がっていないようである。「雫する」自らの尾を楽しむ栗鼠と、遊び心で見守っている作者がいる。「……なり」で形式的には切れを作り出しているようだが、意味的には雫の元が「青時雨」であることは明白であって、この切れは一呼吸置くとといったリズム的な手法で切られたものであろうと解する。他に「蛇お

よぎくるよ羊水ゆらすやう」がある。

猫もいる六月の木の見る夢に

坪内稔典

〔俳句四季〕6月号・六月の木より〕

不思議な句なのであるが、句の背景を確定しなくとも十七音だけで至極魅力的な句なのである。俳句の成立する必要条件には背景の確定はない。無くとも成立する句の方がより句としての凄みが深いようである。とすればあとの背景は読者が自由に想像しながら読めば良いのである。読者に任ざれている、などと言ったりもするのだが、自由度の無限に広がる作品の解釈は難しさも伴って、何かヒントが欲しくなったりもする。他に「六月の木よ鈴なりの猫の耳」「六月の木と歩いたよ午前四時」がある。

実際の猫という解釈もあり得るが、筆者は猫のように見える何かが「六月の木」に繋結しているように解釈した。

美しい数式次から次へ羽化

羽村美和子

〔俳句四季〕6月号・ペガサスより〕

「美しい数式」なるものが、表面上のものなのか、意味的



なものなのかに興味をそそられる。「次から次へ羽化」は、作者の意図するところがどのような映像を結ぶのかは分からないが、筆者の独自の映像は描くことが出来る。はなはだ勝手な映像なのだが、句中の文字に反応して読者が景を結べるというのが、俳句の自由さであり、その自由さを提供してくれる句に感情移入をしたくなるものなのである。

### ところどころ色ついでるし春の夢

平賀節代

〔俳句四季〕6月号・春の夢より

フロイト張りの夢判断をしようというのではないだろう。不確かな記憶の中で唯一残っているこの夢の属性を言い当てると「ところどころ色ついて」となるのである。他には表現がないのである。「春の夢」であるからこそ、それも良しとしよう。筆者などは見た夢の内容を忘れて、一喜一憂しているのだが。

### 5類さて余寒の底の鯉呼吸

栗原かつ代

〔句誌「山河」382号・鯉呼吸より〕

マスク生活が「鯉呼吸」のようであったというのである。感染症の類別は引き下げられたのであるが、やはり気になつて「鯉呼吸」を続けている世人の方がまだまだ多いようである。時事を取り上げながら実に巧妙な作法である。

### 小流れをさらに狭めて轉れる

石地まゆみ

〔句誌「秋麗」6月号・秋麗集より〕

「さらに狭めて」を上流へさかのぼってゆくと解釈した。つまり、そこには鳥たちの求愛の樂園が展開されていたと言う訳である。「狭めて」という他動詞の使用の中に主語が作者であろうと想像させるものがあり、狭くなると認知したということなのであろうと愚考した。

### 海風や山の斜面の梅の花

坂本遊美

〔句誌「都市」6月号・都市集より〕

作者は「海風」を感じている。同じく「海風」を受けているところに梅が咲き出したのである。まだ早春のつめたい風であろうか、それとも花を誘う暖かい風であろうか。筆者はある程度厳しい風を想像した。上五に切れ字「……や」を用いているので、作者が風を感じたのちにその風の中で咲く梅の健気さを詠んだように思うからである。

### 血を舐める夏を味蕾を忘れない

五十嵐秀彦

〔句集「暗渠の雪」より〕

圧巻の句集である。紙面上の句の洪水に押し流されそうだが、一句一句の深さ、広さ、重厚さそして尖鋭さに驚きつつ、それぞれ一句の内容を吟味すると、この内容に俳句形式という形を与えようとする作者に迫ることが出来るように思うのだ。他に「肉体のすきまに櫻詰めてある」「てのひらの雪が腐るとささやけり」「春泥や越境の靴洗ふとき」「月代や蜜壺の匙深くして」「雪降れば雪呑む海を見たくなる」「冷蔵庫死者の家より運び出す」などがある。

# 自選二十句

霜多光代

きたぐにの山を烟らせ新樹蔭  
古城址の空真つ青に新樹光  
港湾へ下る街路や花水木  
稚児の背にふはりと柳絮舞ひ来る  
陽炎や行き交ふ人の静かな目  
酔客の二歩目を狙ふ春北風  
父の日や遺愛の「ライカ」箱に居り  
著莪の咲く山の辺の道僧ふたり  
比丘尼寺ふたつの影の滲む雨

敷石を白に化したり虎が雨  
翠巒を切り裂くやうに電車来る  
肺腑洗ふかに夏山の深緑  
水を打ち客待つ暖簾西鶴忌  
水引の小意気に跳ねて小さき紅  
裸木の天辺際やかゆるぎなし  
仁和寺の老樹の孤高秋惜しむ  
冬薔薇午前零時の深き紅  
藪睨みの猫の背伸びや漱石忌  
虎落笛吾が骨の鳴る音がする  
七度目の干支の丑鳴く初寢覚

## 父のライカ

渋谷きいち

霜多光代さん新珠賞受賞おめでとうございます。

光代さんの水明への入会は令和二年の秋、桜林句会だそうですが、句会への参加は皆無で、椎野美代子先生による通信の指導であったと伺っています。その後山田美佐尾さんの勧めもあり令和四年秋、皐月の会入会となります。皐月の会での活動は一年足らずですが、美代子先生の指導で基礎を学び、皐月の会では鬼之介主宰の熱烈指導を受け、実力を付け今回の新珠賞受賞となった訳であります。四年目での受賞は誠に立派なことだと思います。

それでは光代さんの人となりを少しだけ紹介したいと思います。

自選二十句の中より

尊敬するお父様を偲ぶ一旬

父の日や遺愛の「ライカ」箱に居り

ライカは皆さんご存じのようにドイツの光学機器メーカーのカメラ、カメラファンの憧れであり当時は大変貴重な品と聞いております。光代さんのお父様もカメラの趣味がおりで、家族写真などでお楽しみだったようです。この句の下五「箱に居り」とありますが、居るを辞書で引くと、動きを止めじつとした状態、人の場合に多く用いられるが、古くは人以外にもある、とあります。

光代さんはこの箱にあるライカに父そのものを思い、父の手の温もり、父の威厳までも感じて、この居りを置いたのでしょうか、光代さんの心情溢れる一句です。

光代さんは色々なところでお父様の影響を受けておられるようです。光代さんの俳句の原点もここにあるような気がします。お父様は最初短歌の会でご活躍だったそうです。光代さんも十代の頃よりお父様の指導を受けておりましたが、お母様の病気の看護の為止むなく断念したそうです。

その後、お父様は晩年に俳句作りを始められ最終的に句集を編むところまで頑張られたようです。ところが句集出版の準備段階で急逝されてしまいました。あとを託された俳句未経験の光代さんは大変な苦勞の末、一年後に無事父の遺稿集「はくれん」(白蓮)の出版にこぎつけたそうです。このような経験を積んだ光代さんですが、水明の門を叩くまではまだ数年かかります。その切っ掛けは最愛の御主人

に先立たれ落ち込んでいるのを見兼ねた御子息の俳句教室への参加提案だったので。光代さんの俳句へのスタートです。

翠巒を切り裂くやうに電車来る  
肺腑洗ふかに夏山の深緑

この二句男性的な句でお父様の影響を受けているようです。光代さんは十代のころより父の蔵書を読んでは司馬遼太郎の歴史小説や三国志を読み耽っていたようです。この話を伺って納得です。

水引の小意気に跳ねて小さき紅  
稚児の背にふはりと柳絮舞ひ来る  
藪睨みの猫の背伸びや漱石忌

こちらは女性的で可愛いく面白い句です。摘んだ水引の花軸をしごいて赤い小花を飛ばしていたんでしょう。可愛い少女が浮かびます。二句目は柳絮の舞う瞬間を切り取った一句、ふはりに女性の優しさが滲みます。三句目、藪睨みの猫とはユニーク、その猫の惚けた行動が季語漱石忌にピッタリ。

冬薔薇午前零時の深き紅  
虎落笛吾が骨の鳴る音がする  
酔客の二歩目を狙ふ春北風

一句目の冬薔薇とは枯れ枝にぼつりと健気に小さい花を咲かせて美しいもの、午前零時に何があったのでしょうか。想像を膨らましてみると美人ホステスの色恋沙汰かも、少々怖い感じがします。二句目の虎落笛の鳴る音は、ヒューヒューですね。骨の鳴る音はたぶんコキコキでしょうか、この取り合せが面白い。しかし骨の鳴るのは少々怖いです。三句目の酔客の二歩目、一歩目から危険です。足を掬われないよう注意、サラリーマン外に出れば七人の敵ですから、ゆめゆめ油断なさらぬよう、この三句いずれも少々怖い句でした。

陽炎や行き交ふ人の静かな目

気になる一句、行き交ふ人は静かな目で何を見ているのでしょうか。揺らぐ陽炎の中にもう一人の自分を、自分の未来を冷静な目で見極めているのでしょうか。

七度目の干支の丑鳴く初寝覚

最後の一句、女性の年齢に触れるのは少々気が引けますが、お年の割に大変元氣、男性的で大胆、女性的で繊細、さしずめ肝っ魂かあさんと言うところでしょうか。これからもお元氣で俳句作りに精進し、お父様の句集に負けない立派な句集を出版するのを楽しみにしております。今後のご活躍をお祈り致します。

# 自選二十句

小林京子

春の朝ひんやり沈む相撲部屋  
鶯や梢跳ね上げ飛び立てり  
啓蟄や錆びしバケツに残り水  
庭下駄のやや湿りたる夏の朝  
蜘蛛の囿や遠くに白き長屋門  
竹垣の奥に誘ふや額の花  
麗しき少年の透く青簾  
洗ひ髪のままジン飲む摩天楼  
琉金の尾ひれの余韻渦ゆるり

麻服を預かりしまま余熱あり  
秋晴れの銀座マロニエ通りかな  
満月や白きハイウェイ空に入る  
不 忍 池 茫 茫 と 敗 れ 荷  
チエリストの吸ふ息深し秋思かな  
落葉掃く若き僧侶の目はブルー  
黒髪に金糸編み込む聖夜かな  
障子に鬼と狐鳩来て影遊び  
伊勢海老や腰曲げ易く反り難し  
落葉風回転ドアを押すをんな  
咳一つ聞こえ満場指揮者待つ

## 俳句は鏡、何を映すか

網野月を

新珠賞受賞作品十五句の中から数句を鑑賞する。以下、順不同。はじめに最も共感した句三句について鑑賞する。

色鳥や 慎み深き 遠会 積

咳一つ聞こえ 満場指揮者待つ

羅を召し撫で肩の 句立つ

第一句は、中七座五の句意がそれだけで完結している。座五の「遠会積」の修飾に中七の「慎み深き」を配している構成である。作者からはそう見えたということでもあるのだろうが、それ以上に「遠会積」の主と作者の関係性が的確に表現されている。近くに寄ってきて会話するのではない。と言って素っ気ない訳ではなく、いたって丁寧な物腰を作者は見たとつている。極めて大人な関係性を示していて、社交の根本ともなる行動規範を見ている様だ。叙述の技法では、一つの事物に一つの修飾という俳句表現の王道を守つてもいる。要するにこの中七座五は完結しているのであつて、あとは俳句として上五にどのような季語を配するのだが、作句の上で

大問題となる。そこで何とも絶妙な季語を切れ字を付して呈示した。上五の「色鳥や」の選択は的確であり、巧妙でもある。連作十五句の題は「音楽会」であつて、いたつて聴覚的な本質を暗示しつ時空間の設定をしているのだが、句の季語である「色鳥」の本意は視覚的な要素を多く占めていて、句に立体的な要素を付与することに成功している。また「音楽会」に集う淑女紳士等にも共通したイメージが加味されるところがある。句の統一感を演出する上でもこの季語の選択は絶妙であつた。辞書的には「慎み深き」は「つつしみぶかき」であろうが、「つつしみぶかき」と濁音を廃して披講したいところである。

第二句は、景の中に作者自身が存在している構成である。入り込んでいと言つた方が適切かもしれない。それだけに上五の「咳一つ」で完結できる内容なのである。句意を完結させて季語を配するという第一句に比して、季語を句の真ん中において、句意を補填するという構成である。第一句とは真逆の句の成立要件を有する句なのである。中七から座五にかけての「満場指揮者待つ」は少々舌足らずな言い回しであるが、それは短詩形の宿命というものである。それよりも舌足らずな言い回しで充足している訳はつまり句の主なる部分が上五だからである。「満場指揮者待つ」は季語「咳」を空間的に何処に位置付けようかということに過ぎないのである。季語の兼題が出題されたときに作句の順序としてよく考へていることである。「蛙」を何処で鳴かせようか。「百合の花」を何処に咲かせようか? という、あれである。この句



では「音楽会」の、しかも演奏直前の景の中に「咳」を閉じ込めたのである。ここで問題となるのが「聞こえ」であろうか。「聞こえ」の要不要論である。「咳ひ一つ」という手もあるのだが、作者はここで敢えて「聞こえ」として、静寂の中に「満場」の客という主語を意識させている、と筆者は解釈した。つまり、作者一人が「聞こえ」たのではないのである。ここに景の中に入り込んでいる、という感覚が生まれてくるのである。

第三句は、座五の決め台詞「句立つ」が句の方向性を決定している。「句」はむしろ嗅覚的なものだが、この句の場合には「気品」「華やかな美しさ」程度に解釈すればよいであろうか。つまり「気品」「華やかな美しさ」というものは、嗅覚的感覚で認知するものなのである。極論すれば、人間の底辺は触覚的感覚で、より高度な資質は嗅覚的感覚で受け取るものなのではないだろうか。句中では「羅」に包まれて透けて見える「撫で肩」にその「句」を感じ取ったということになる。何とも色っぽいことなのであるが、女性が女性を見てのことであるから、一種のポジティブな感覚を覚えたのであるまいか。共通の価値観をそこに見出して、気脈を通じてに似た安心感や「音楽会」を共に構成する聴衆として居合わせることに一種の名誉感のようなものを嗅ぎ取ったのであるまいか。句の構成は、「召し」の主語はある淑女であり、「句立つ」の主語は淑女の一部の「撫で肩」である。徐々に空間を絞り込むという作句のオーソドックスな方程式に則っている。

### 炎昼や変奏曲は超絶技巧

### 香水瓶の空となり終楽章

この二句はどちらも破調のリズムを有している。前句は五七七、次句は七五六のリズムである。次句は十二十六とも考えられる。実は破調を採用した時の作品にその作家のリズム感が垣間見えるものなのである。作者はどうやら長母音に対しては寛容なリズム感を有しているように思われる。これは長谷川かな女師の特性でもあり、水明では受容されて来た歴史があるということが出来るだろう。

### チェリストの吸ふ息深し秋思かな

問題句かも知れない。チェリストを見て自らの秋思に思い至る、と解釈した。

### 長身のボーイソプラノヒヤシンス

座五の季語「ヒヤシンス」と句意の取り合わせは成功している。断定そのものだ。

次に受賞作品以外に、次選句の中から数句を鑑賞する。

### 春の朝ひんやり沈む相撲部屋

鶯や梢跳ね上げ飛び立てり  
満月や白きハイウエイ空に入る

### 黒髪に金色編み込む聖夜かな

以上の四句については、投句された際の句会に筆者は同席していた。どれも秀句揃いである。「鶯や」は景を、「春の朝」は景と自分を、「満月や」は自分を、「黒髪に」は自分もしくは他の主人公を詠み込んでいる。自分の存在を何処かに意識している作法で、無論、好感度抜群の句である。

俳句は鏡である。一体、この作家はこれから句中に何を映すのであろう。しずかに見守りたいと思う。



七月号の巻頭句

季音 雪

天辺を玉座とおもふ沙羅の花

西山貴美子

季音 月

白牡丹五重塔を遠巻きに

高島寛治

季音 花

戴冠の典雅な調べ青時雨

野田静香

水明集

逃水を追うて八十路の青い鳥

清水桂子

鼓笛集

薰風や川の字に引く三輪車

加藤でん治

山紫集

菜園の畝にさしたる風車

越田栄子

山本鬼之介 選

水明集

風にのる犬の産声柿若葉  
藁の火を煽るはちきん初鰹  
なまくらが挑む縦縞初がつを  
夏きざし阿吽でくぐる縄のれん  
腹掛に「金」の一字昼寝かな

伊 奈 菅原卓郎

本籍はダムの底なり虹かかる  
少女の夏窓全開のコーラス部  
夏落葉世代交代ある菴  
羅に銀杏返しや詩仙堂  
五月雨や写経の筆の抄らず

さいたま 梅澤輝翠

万緑に分け入る君の赤ザック  
万緑や銀の湖さへ飲み込まむ  
新樹光つり人の背をくつきりと  
万緑に少し酔ひしや身の軽し  
万緑に紛るる少女その声も

さいたま 菅原真理

芍薬やだらりの帯の凜と行く  
見えさうで見えぬ鳥影夏霞  
たたみかくる台詞回しや薄暑光  
母の日に特養を訪ふ家族連れ  
走り根の生き生き浮かぶ五月雨

岡田宣子

ふと声を聞きたき人や朧月  
夕風にほのかな香り朧月  
キャンプの夜更けて熱熱珈琲を  
ゆつくりも大事な個性かたつむり  
まいまいの殻うるはしき成長線

熊 谷 越田栄子

新樹光ご利益あらむ大櫓  
新樹から貰ふ正気や我が余生  
あくる日の香り冷たき筍飯  
筍飯二軒先には京の人  
竹林に鳥の影あり聖五月

さいたま 新 暦文

柿若葉つい一枚を嚙んでみる  
少年の目差涼し弓道場

さいたま 清水桂子

江戸つ子の心意気食ぶ初鰹  
触感の程よき湯呑新茶汲む  
初物を好む父居て初鰹

初夏やインド更紗の染め香る  
軽やかに浅瀬をわたる夏の蝶  
葉桜や庭園統ぶるその葉音  
悠悠と泳ぐ一尾や鯉鱗  
予告なく商店街に黒揚羽

平塚 丸屋詠子

画架据うる新樹の中に妻を置き  
妻には内緒レモンの花に黒揚羽  
口に蜜豆宝飾店に五人組

森下山菜

さいたま 元田亮一

新樹光吾子の初めて踏む大地  
ナイター九時二死満塁にコマーシャル

帰郷して水羊羹の甘さかな  
五月雨の匂なつかし石畳  
たをやかな曲線見する夏衣  
喧騒を遠見してをる山椒魚  
取りあへず夏山目指し歩みゆく

美人画の細眉顰む五月闇

小林京子

篠崎紀子

「細君」と言ふ古風な響き夏薊  
慈照寺の浅き流れを山椒魚  
むさしのの比企の郡の四葩かな  
五月雨や松林図なる新都心

ナイターや野球音痴も肩を組み  
ナイターや会社帰りの縄のれん  
無住寺の新樹に子等の声残る  
陸橋から見ゆる並木へ虹の橋  
腰かがめ陸の日向に昆布干す

島医者 of 句を編む姉妹若葉風

越谷 阿部幸代

皆川更穂

状差しに亡き人の文五月闇  
万緑の眠りの中へ夜行バス  
ラジオ鳴る爺のゐる庭ゆすらうめ  
護摩供終へ五感にしむる若葉雨

ナイター佳境白球星の隙間貫く  
新樹陰再就職の定期券  
離陸して円き地平や二重虹  
弁当は筍飯や道普請  
景雲が雷雲へ徒ならぬ地震

五月雨や景德鎮の深き碧  
普段着の団十郎や夏帽子  
止め碗の蓋のしづくや茗荷の子  
陸奥へ来たれば残る鴨の群  
勝ち組の巨大な葬儀ひめじをん

さいたま

池田珪子

水温む稚魚の群透く漁港かな  
たんぼぼや相抱きたる道祖神  
筍の獣のごとし直売所  
緑陰や女体神社の巫女人形  
麦秋や仏の蹠ほどのナン

さいたま

本橋稀香

命噴く樟の匂ひや夏落葉  
日本の四季に乾杯豆ご飯  
万緑に吸ひ込まれゆくあずさ号  
砂場の子らの影を彩る新樹光  
万緑や牧の牛舎にいま誕生

西幅公子

山祇の化身なりしや山桜  
春昼のぜんまいゆるき鳩時計  
複写機の吐き出す紙や春の昼  
春昼を乗せて定刻路線バス  
地下街に和洋中華や夕薄暑

森美枝子

飛魚の空中散歩青き空  
着ることもなく父の形見の夏衣  
日矢のなか水を湛ふる五月の田  
蜂の巣や軒に構ふる用心棒  
草枕五月の風を胸深く

反町 修

花道を口をへの字に五月場所  
五月雨に三門煙る知恩院  
夏の霧知床の山隠しをり  
草笛の音響きをり懐古園  
五月場所反り身で残す徳俵

村杉清吉

古農家の荒庭かざる柿若葉  
世代差の中でくらすや柿若葉  
婿殿の手捌きあつぱれ初松魚  
乳母車ゆつたり押しゆく麦の秋  
万緑や公園すつぱりお伽城

山岸久美子

夏場所や相撲甚句が聞こえけり  
飛魚や神風に乗り来たるやう  
飛魚のレースの翼我欲す  
盆の月生命あるもの還る土  
風薫る縄文土器の深き鉢

千坂平通

きたぐにの山を烟らせ新樹蔭

山萌ゆるバステルカラーの新樹蔭

車窓過ぐる新樹しらじら揺られをり

ビビットな原宿通り新樹光

古城址の空真青に新樹光

さざ波は風の足跡水温む

一雨の路傍の石に蝸牛

風に乗り空の彼方へ夏の蝶

振袖の娘は二十歳白牡丹

夏めくやロックライブへ向かふ古希

杉落葉やぐらを隠す吹きだまり

夏落葉抜くる風音切通し

鎌倉の古道走り根夏落葉

鎌倉の町色を重ねて新樹光

ダイレクトメールの旅や夏銀河

テーブルの端に一匹春の蠅

豆の花石ころ多き畑かな

豆の花面の雀斑数知れず

桃の花屋敷の内に畑少し

新茶汲むあの和菓子屋の芋やうかん

さいたま 霜多光代

綿引まりこ

竹澤和子

若狭 山崎郁子

薫風や明け六つの鐘鳴り渡る

誰も来ぬ五月の泉あふれぬて

榎林のそよぎ五月を膨らます

紫陽花の日毎ふくらむ雨催ひ

螢火の向かう向かうへ飛びにけり

雲の峰盤の上なる角睨み

飛車角を落とさぬ祖父とこどもの日

鹿の子の眼香車のやうに一点を

玉将を選ぶが孫やソード水

喩ふればと金句作の夏の日よ

コロナ禍の名残のマスク薄暑かな

母の日に花屋の車焦る坂

薫風や自転車軽し下り坂

外人の賑はふ店の薄暑かな

薔薇咲きて主の治癒は確実に

棘よけて若芽摘む指春惜しむ

春惜しむ店仕舞ひなる古書肆かな

スニーカーの白き軽さや春の蟬

窓外を緑に染むる濡つつじ

水温む脚ゆらゆらと沼の鳥

さいたま 加藤でん治

吉川拓真

山戸美子

寺町知子

橋の名を叫び薄暑の漕艇部  
佃煮屋の暖簾染抜き薄暑光  
軽暖や櫓舟でくぐる十二橋  
ホームへは階段と決め駅薄暑  
老鶯や静もる朝の露天風呂

さいたま 森 和子

彼岸西風瀬戸物市をぶらりとす  
彼岸西風野草の花の地を這ふや  
姿よし色よし糶の桜鯛  
桜鯛漁村の名消え今町に  
色白の友の帽子に葦草

さいたま 後記朝香

棟梁が矩差当てて柿若葉  
小さき実を葉裏に隠し柿若葉  
初松魚食うて踏ん張れ五月病  
鈍感も時には良けれ含羞草  
図書室の多感な少女合歡の花

飯田忠男

スーパ一のふるまひ新茶味よろし  
古茶あるを忘れ新茶を二袋  
古茶を汲むうすくれなるの萩茶碗  
香る花なき霊園墓地を若葉風  
捨つるもの増えゆく余生竹の秋

杉戸 佐々木史女

取説を風に遊ばれキャンプ村  
名を呼びて思ひの丈をキャンプファイヤー  
石垣に二泊三日目かたつむり  
雨粒の音に目覚むる蝸牛  
子らの歌聞き流しをりかたつむり

緒方みき子

細き手の白さに黙す半夏生  
潮風をいなす牡丹や浜離宮  
夜半の月ささやき止まぬ卯波かな  
柏餅剥がし損ねし葉恨めし  
かしはもち苦勞も甘く懐かしく

吉川 杉浦理恵

式典のテント張り終へ夏の雲  
水ゆらぎ風からめとる代田かな  
君のゐた筍飯の夕景よ  
ほつほつと代田の方から日の暮るる  
碧空や百科事典の土用干し

川口 新井のり子

芍薬や緩き蕾を求めたる  
芍薬を活くる着物の似合ふ人  
薄暑かな心震はすカンパネラ  
薄暑かなコロナ禍過ぐる家族旅  
特選の新茶満喫老夫婦

さいたま 小駒さち子

華やかに闊歩の女性夏めけり  
方位盤に並ぶ山並風薫る  
最果ての緯度示す碑や海鷲鳴く  
古戦場新樹眩しき武者の影  
青空に樗大樹の緑映ゆ

春日部 仲田利子

更衣今朝は特別おしやれして  
一重八重片隅に咲く芍薬よ  
芍薬のふふみて香りほのかなり  
流線型メット一列街薄暑  
襟元のタオルはリネン薄暑かな

さいたま 樋口元美

最終日は鳥最南端のキャンプ場  
星空は我のものなりソロキャンプ  
ででむしや低空飛行の軍用機  
足跡は一筆書きやかたつむり  
ででむしの硬く張り付く流人墓

所沢 飯室夏江

群生の海芋の庭や空き長屋  
今ひとたび「ダイアナ」探す薔薇の園  
白藤の蔓の引き寄せたる入日  
書付は奥に畳まり更衣  
新茶くむけふの句会は雨もやう

大阪 遠藤人美

銀山の坑道くぐる夏の旅  
新樹背にスリル満点大道芸  
大坂城見上げ新樹の川下り  
一步一步万緑の中頂へ  
万緑や白く輝く天守閣

さいたま 森下美智枝

蝸牛やたら怒るな怒るなよ  
麦秋や嫁御と食らふ煮ほうたう  
暴れ川決壊の碑や麦の秋  
夕薄暑老骨ぎゆつとストレッチ  
特段の事何もなし五月闇

さいたま 秋谷風舎

朝掘りのさしみ筍希少な  
豆飯に四季を感じて香り嗅ぐ  
潔き夏の落葉や奥の院  
参道の新樹彼方の鳥居まで  
新樹映えテニスコートに球連打

小川洋子

片かげり譲り合ひする小道かな  
青田風ささめくごとくそよぐのみ  
思ひきり水に触れたし夏柳  
鬱憤の拳を握る青胡桃  
マスクなく逆説の街夏めけり

小山あつ子



裕着て千秋楽の芝居小屋  
風抜くる野点の客の裕かな  
シーサーが屋根で踏ん張る五月晴  
海越えし友の便りや花ミモザ  
日本海茜の空を鳥雲に

さいたま 湯浅 和

遠来の友はやさしや草の笛  
側溝に足ふみはづし柿若葉  
緑陰に何やら紡ぐ鳩一羽  
清流に鯉のぼり舞ふ壮観さ  
薫風に走り高飛び優勝す

和歌山 南條さわゑ

葉桜や花の妖精今いづこ  
子どもの日絵本の中へ小旅行  
幼児と桜トンネルくぐり行く  
陽を浴びて光る黄金や麦の秋  
蝸牛何処へ急ぐか雨の中

石浜悦子

筍飯母の味には追ひつけず  
代田より富士の農鳥仰ぎ見る  
筍飯友の手作り届く朝  
母の日の式典我が家は鍋パーティー  
筍飯蟹を加へて豪華版

川口 田村福美

画用紙の絵の具の滲み五月雨  
農業の先行き語り五月雨  
家中に響く足音子供の日  
三人目間近に生まる子供の日  
夏さざす葉陰を指す畑仕事

若狭 岡本祥子

「夏は来ぬ」メロディふいと口をつく  
カンバスに緑ぶつける立夏かな  
樹々がみな深呼吸するけふ立夏  
大陸からの風に戸惑ふ藤の花  
ナイターの廻るウェーブ三周目

さいたま 鳴海順子

夏座敷祖母の鏡台秘密めく  
青嵐古参ライダー湖畔駆く  
球児らの交はすエールや夏の空  
夏さざすポニーテールの乙女かな  
十円玉入れる電話や大夕焼

松村登美江

鳥たちと山粧ふを称へ合ふ  
秋風を抄つてみたる掌の白さ  
ぶつぶつと怒つてをりぬ柚子の顔  
小夜更けて月の光に抱かるる  
見返りの美人の遺風秋扇

所沢 関根千恵

薔薇園のアーチくぐりて香に浸る  
母の日にふらりとやつて来る男の子  
母の日にババ抜きゲーム興じをり  
初鯉主役になりて盛られをり  
朝ぼらけ驛場にはぬる初鯉

東京 柳父はる

若葉風林の先の露天風呂  
綻びを気にせぬ夫よ初裕  
居酒屋のそら豆の味薄き青  
看護師の指導細やか窓に雷  
片陰の病窓覆ふ新都心

さいたま 鈴木藻好

母の日に母の好んだあやめ供ふ  
憂きことも丸呑みするや錦鯉  
海開き老の走りの速きこと  
びくびくと竿しなる夢鮎解禁  
ナイアガラの滝とおぼしき藤ロード

和歌山 嶋田洋子

茗荷竹ひと雨ごとにのぶる朝  
早朝の新茶の香り仏間かな  
母の日や渋きワインの届く昼  
いつの間にかんの花の匂ふ頃  
ひとり居の仏間明るきアマリリス

鬼石 加藤ナヲ子

故里は今万緑の裡に在り  
優しかりし友の思ひ出ゆすらうめ  
県展へ絵筆忙がし夏に入る  
折紙の花添へ母の日のケーキ  
遠き日の母丹精や莢豌豆

宮代 関谷多美子

ひとり旅風の匂ひの浅き夏  
夏浅し雑草庭に蜂起せり  
夏浅しまだ放せない箱ティッシュ  
薄みどりを透ける陽射しや花は葉に  
葉桜や恩師偲びて酒を干す

さいたま 北出久美子

戸を立てしままの隣家や花は葉に  
今朝の夏マテイスの赤の輝きぬ  
夏立つやわたせせいぞうの絵のやうに  
白頭巾の強訴のごとし山法師  
横綱の勝ちて平和な夏の暮

さいたま 岡田芳春

官庁街上着片手の薄暑かな  
心無しに伸ぶる徒長枝薄暑光  
能楽堂へ電車遅延の夕薄暑  
ホコテンの半袖目立つ街薄暑  
六度目のワクチン予約薄暑かな

綿貫ひさの

柏餅二個目はじゃんけん兄弟

さよならと手を振る園児夕薄暑

新緑をまとひて少女逆上り

園児らのじゃんけん遊び薄暑光

雨音消ゆ天道虫のかがやきぬ

超豪華に施設に鎮座古代雛

古代雛その家柄を考ふる

週刊誌と笥持ちて友来たる

五月晴百歳までは生き抜くぞ

部屋に蜘蛛生きていろよとじつと見る

麦の秋地産地消のパン屋あり

人間の愚かさあふれ麦の秋

麦の秋国産ウイスキーで祝杯

ビル谷間高さ競ひし鯉のぼり

白藤や玉三郎の舞ふ姿

川風や窓に小さき鯉のぼり

見栄張つて背筋のばせり延齢草

花冷えや素直に動かぬ老いの指

母の日は亡母の法事や涙雨

カーネーション一本のせておかき来る

さいたま 山下ユリ子

並木道零るる緑手に余り  
砂浜の泡立つ波や夏来る

葉桜や会話の弾む老夫婦

短パンの足の白さや立夏かな

花は枯れ雨後さえざえと緑かな

川村 治

遠き日や父母の作りし柏餅

手に取りて先づ葉の香り柏餅

空青し新樹の揺るる別所沼

釣人は身じろぎもせず沼薄暑

緑蔭に腰をおろせば鳩の寄る

東京 畑宮栄子

雪溪や清く厳しく固くあり

苗札を並べ窓辺のハーブ園

苗札の小さき文字や朝日さす

苗床のにはかに賑はひ雨上がり

パセリセイジ呪文をと唱ふハーブ苗

藤 沢 小島喜代子

乾杯は大ジョッキでしよ麦の秋

麦の秋パンは厚切りこんがりと

かたつむりお前に足らぬは自己主張

殻を脱ぎすべて見せ逝く蝸牛かな

汁ものがないとだめなの朝曇

さいたま 鈴木香音子

高原和子

東京 山中いちい

さいたま 川島夕峰

せせらぎの奥へ箱根の夏山へ  
雑草といふ可憐な花よ初夏の庭  
風鈴の微かにヨガの小休止  
新品の傘買ひしあと旱梅雨  
淡水と海水混ざる海月かな

さいたま 石関六弦

お花見の打診の電話孫の声  
荒れ果つる屋敷の庭や芽吹く木々  
富士山とコラボレーション芝桜  
リメイクや解き捨の洗ひ張り  
高速道大渋滞に麦茶干す

武田重子

山野草見つけてはしやく初夏の山  
初夏の空富士もぼつかり高尾山  
ときめきや花めく牡丹幾重にも  
百花王番傘さして美白かな  
ほろ酔ひか多発の地震や初夏の夜  
豆飯や豆の多さとにらめつこ  
母の日のLINEクーポン娘より  
抱腹のムカデ競争夏始め  
初夏やエール飛び交ふリレー戦  
夏来る声枯らしたる応援団

小田美智

鈴木敦子

栗飯をもらひ一粒撮み食ひ  
半月板の手術を終へて野分あと  
橋封鎖ルート変更野分かな  
こほろぎの跳ぬるを追ひて孫二人  
遠回りダム湖に映る盆の月

若狭 佐野友夏

でで虫の天井は渦ほのあかり  
麦秋やシネマの中の風の道  
新茶くみ緑の棚田思ひ出す  
走り梅雨女男石護岸しのぼるる

さいたま 藤川比早子

萍の水より迅く田に奔る  
蛇衣を脱ぐや水音絶え間なく  
大の字に空翔んでゐる昼寝の子  
気を孕みきりと立てり古代蓮  
新しきカーテン掛くる薄暑かな  
薄暑かな岩波文庫星三つ  
道行きは芍薬一枝帯に挿し  
雨含みなほ芍薬の絢爛と  
連休の単線の混み夏に入る  
さりげなき一筆箋に夏来る  
病室の友見上ぐるや花は葉に  
若葉して空はサファイア深呼吸

古池恵里子

横山礼子

橋爪さなえ

葉桜は色さへ少し惜しみをり  
葉桜や忘れし城の石の段  
天に向け海の明るさ立夏かな  
葉桜や光零るる緋毛氈

草 加持永喜夫

うらなりのきうり種取り味噌を詰め  
茄子のへた陽当たらぬ裏白いまま  
オクラ花凜と咲きたる山の上

さいたま 駒谷行雄

柿若葉真向かうの庭かくしたり

鬼石 榊原聰子

親戚に御寺の多し盆を知る  
われ臆病晩夏の墓地を駆け抜くる

藤 沢 藤田寛二

五月晴田舎暮しに移住人

めぐりくる君の忌日や桐の花  
風薫り自己判断となるマスク

ジャム作り厨女となる薄暑

さいたま 糸井しるく

☆ ☆

走り茶の喉越しや息災の笑み  
芍薬の深紅の笑みや吉か凶  
芍薬や人の寄り添ふ花も根も

秋麦や東北道は黄に染まる

落合和枝

帯締めて和装の女薄暑かな  
老鶯や野山に翔んで鳴き交す

板前の京都料理に薄暑かな

東京 大島千恵

若狭(先師)の句碑

低き空雨に首垂るる額の花  
夏の空呼ぶが如くに鳩の声  
夏の空のびゆく白き筋の先

正 うめのはな吾生涯の友なれや

誤 うめのはな吾生涯の花なれや

### 誤植訂正

七月号の訂正のお申し出がありました。  
お詫びして訂正致します。

〇七十三頁

# 作品評

## 山本鬼之介

藁の火を煽るはちきん初鰹 菅原卓郎

春から秋にかけて、黒潮にのり日本の太平洋沿岸を北上する鰹は、時季によってそれぞれの漁場で漁獲されるが、中でも土佐の一本釣りは言葉の響きがよく、聞いただけで口中に唾液が溢れ出るようだ。厚目に切った刺身や叩きにした土佐の海の鰹が皿鉢料理の大皿に盛り出されると、それだけで幸せ感が総身を駆け巡る。

「はちきん」は、高知県で、勝気で向う見ずな女性のことを言う言葉である。この句を読むと、暑さの中で鰹の叩きを作っている気つぶのいい若い女性の姿が現れてくる。七輪の金網に載っている鰹の切り身を藁火でじんわりと焼いてゆく。火が消えないように渋団扇を小まめに使い、吹き出す顔の汗を手拭で抑え、念入りに火をとおす地道な作業だ。一仕事終えた後のはちきん娘の笑顔が最高だ。

作者は、以前から「はちきん」の言葉を温めていたのであ

ろう。言葉の奥に、その語感に相応しい女性像が見える。

本籍はダムの底なり虹かかる 梅澤輝翠

ダム建設のために、全国各地の村落がダム湖の湖底に眠っている。その数は、インターネットによるダム湖百選の他に数え切れないほど多くのダム湖があるようで、本句に触発され、ダム湖の存在意義を改めて考えさせられた。

毎年梅雨時にダム湖の水位を保てる降水量があればよいが、濁水が続くと水位が下がり続け、終には湖底に沈んでいた建物や橋梁・火の見櫓、果ては墓地までも曝け出してしまふ。たまたま観光などでその光景を目撃した人は興味半分かなりショックを受けるであろうし、ましてや、その地に暮らしていた人が見れば、懐かしさを通り越して哀惜の念に駆られるのではないかと推察する。

幸いにも本句のダム湖は、いま正常な水位を保ち、雨上りの後に現れた虹を湖面に映す雄大な景色を描いているが、自分の本籍が今は湖底なのだと思うとやりきれない気持ちになるのではないか。ショッキングで政治色を含んだ題材を浪漫漂う虹で融和させたところに作者の俳句眼を認めた。

万緑に紛るる少女その声も 菅原真理

見渡す限りすべて緑であるという季語「万緑」の力強さは

改めて言うまでもないが、それだけに、無作為に使える季語ではないと思う。掲句ではただ一人の少女と彼女が発する声とによって万緑の雄大さを表している。人跡未踏の奥深い森の中に、突如放り込まれた一少女の発する驚きの声である。

芍薬やだらりの帯の凜と行く 岡田宣子

陽が西に傾く時刻に、置屋から揚屋や茶屋へ向かう舞妓の姿を、男衆おとこの技によってきりりと締められただらりの帯で示している。「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は……」の慣用句が示すとおり、重い衣裳に負けず背筋を伸ばし、リズムよく歩を運ぶ舞妓さんに道行く人の眼が注がれている。

ふと声を聞きたき人や朧月 越田栄子

周囲の景色やその場の雰囲気によって、人恋しい気分になることがあると思う。朧月の夜ともなれば、心に思うのも特別な人なのであろう。いつの日であったか、心ときめく春の宵、背後から話しかけてきたあの人。いま月の下でふとあの時の声を聞きたくなくなった。

あくる日の香り冷たき筍飯 新 曆文

豆飯と同様に、筍飯の美味さは格別である。炊きたてが最高で、少し冷めたのもまた佳しであるが、完全に冷めてしま

った翌日のものは如何なものであろうか。作者は冷えた翌日の筍飯を、食感ではなく臭覚によって捉えている。炊きたての湯気から伝わる香りは大いに食欲をそそるが、冷えた筍飯の香りには、子供の頃や青春時代への郷愁があるのではないか。

柿若葉つい一枚を噛んでみる 清水桂子

若葉の中の代表的な柿若葉であるが、その光沢と厚みが食感を誘うのかと思う。柿若葉を観察し、それにあきたらず手に取ってみる。そして、思いがけずそれを口に運び軽く歯を立てたのである。

妻には内緒レモンの花に黒揚羽 森下山菜

なかなか解釈の難しい俳句なので選ぶのを躊躇ったが、句が放つ魅力に負けて取り上げてしまった。先ず考えたのが、レモンの花に黒揚羽が止まったことが妻に対する内緒ごとなのか否かであったが、両者間に因果関係があるとするとその説明が困難になる。内緒ごとは罪のない軽い内容のものであり、そのような状態の時にレモンの花の黒揚羽に遭遇して心の高揚感を募らせた、との解釈に行き着いた。

むさしのの比企の郡の四葩かな 小林京子

現在の埼玉県比企郡は、七世紀頃に武蔵国の郡として成立し、十一世紀頃（平安時代末期）から、後に鎌倉幕府の御家人となった比企能員ほか比企一族が比企郡一帯を統治した。

このような武蔵野という広大な地と歴史を背景にして紫陽花を詠んだ俳句は珍しいのではなからうか。辺りを威圧するような威厳のある大輪の花を思い浮かべよう。

状差しに亡き人の文五月闇 阿部幸代

来状の数にもよるが、一般家庭の状差しに収まる書状の数は限られているから、この句にある亡き人は、おそらく一年以内に亡くなられた方ではないかと想像する。一方五月闇は、状差しから判断して、作者の自室の燈火を点さない状態を意味していると推察する。

真夜中に亡き人の夢を見た。陰鬱な梅雨闇の中に、その人からの手紙があることを、ぼんやりと意識している。

初夏やインド更紗の染め香る 丸屋詠子

印度更紗について広辞苑の解説を読み、夏場にかんりの高温になるその国ならではの文化と意匠を感じ取れる布地であることが判った。日本製のものとして、洗濯したときの色落ちなど、注意しなければいけないことがあるようだが、反面、独特の異国情緒を味わえる布地であろう。作者は、染め

の句に遙かなる印度の地を思い描いている。

五月雨の句なつかし石畳 元田亮一

石畳から何となく門前町の雰囲気が伝わってくる。「五月雨の句」は、実際は五月雨に濡れた石畳が放つものであるが、見方を代えれば作者の心の中で造成された句とも言えよう。かつて何処かで同じような場に行き会ったことがあり、それが五月雨によって呼び戻されたのである。

ナイターや野球音痴も肩を組み 篠崎紀子

今年三月、日本がWBCで世界制覇を為した効果によって、直後に開幕したアメリカのメジャーリーグや日本のプロ野球への関心度が急激に高まり、野球のルールを識らないはずの素人までが熱中している昨今である。家庭内は勿論、居酒屋の店内のテレビで野球観戦しているファン達が、逆転ホームランのような好場面でだれかれ構わず肩を組んで歓び合っている。「野球音痴」はまことに現実感の溢れた妙味のある言葉である。

弁当は筍飯や道普請 皆川更穂

都会の住宅街でも時折遭遇する道路工事の現場である。昼食時の様子までは見たことがないが、筍飯の弁当となると、



当人の妻の人柄までもが話題になるような気がする。道普請という古風な言葉の斡旋も俳句に適っている。

五月雨や景德鎮の深き碧 池田珪子

古美術商の店頭飾られている景德鎮窯の青磁であろうか。外は陰鬱な梅雨時の雨。それに対して見入る人の心が吸い込まれてゆくような深みのある陶器の碧である。その方面に素養のある作者ならではの一句と見た。

万緑や牧の牛舎にいま誕生 西幅公子

深々とした緑に包まれた牧場の牛舎。牧場の家族や従業員が介助して、無事に仔牛が生まれた。歓声が上がる。作者も以前経験したことがあるような臨場感のある俳句である。

飛魚の空中散歩 青き空 反町 修

休むことのない飛魚の飛翔を空中散歩と表現したのが面白い。飛魚が聞いたら何を言うかとむくれるかも知れないが、人から飛魚への細やかなエールだと受け取ってもらえれば幸いだ。

婿殿の手捌きあつばれ初松魚 山岸久美子

娘の夫が手際よくまるまると肥えた鰹を捌いている。職業が漁師か魚屋でないとしたら大した技量である。昔の殿様の

ように、「天晴れ天晴れ」と日の丸扇で差し招くのではなからうか。こんな婿さんがいたら、どんどん小遣銭を奮発してしまっだろう。

筍の獣のごとし直売所 本橋稀香

みちの駅に出入している地産野菜の直売所であろう。孟宗竹の皮のままの筍は、まさに猪にそっくりである。筍は猪の好物の一つだそうだから、共食いと云ってもよからう。

春昼のぜんまいゆるき鳩時計 森 美枝子

一秒の狂いもない電波時計など、発条時計の時代を生きた者には、その正確さと便利さに驚嘆するばかりである。発条時計は、ペットと同じように、毎日規則正しく世話をする必要があった。子供の頃、きまった時間に踏台にのって、柱時計の発条を巻くのが日課であった。発条を巻くのをサボったひとがいて、春昼に相應しい間延びした声を発している鳩時計なのである。

花道を口をへの字に五月場所 村杉清吉

爽やかな五月場所。国技館に場所入する関取衆の派手な浴衣姿が実に佳い。への字口の力士は、作戦を練りつつこれから取組の土俵へ向かうのか。それとも、惜敗して悔しさを秘めての口元か。悲喜こもごもの十五日間の物語である。

## 水琴窟

(水明集六月号鑑賞)

池田雅夫

梅が香や枝から枝へ鳥の影

諏訪サヨ子

「梅にうぐひす」とは云うものの、梅の木で囀っているのはほとんど「眼白」で、鶯を見たことがない。「鳥の影」はおそらく眼白であろう。眼白は秋の季語とされている。自由奔放な鳥の動きと「梅の香」を同じ次元として捉えている。

風光る手振り大きくガードマン

向井章子

「ガードマン」は本来、警備員、人物警護などを示すが、ここでは交通保安員なども含めたものと解釈しよう。キビキビした体の動きや「手振り」が人の目を引き、周りの景色さえ輝かしく思えた。「風光る」との取合わせがおもしろい。

ほつれ髪そつと手直し雛納め

高橋満耶子

「ほつれ髪そつと手直し」は自身のことかと思つたが、下五で「雛納め」と意外性で締めている。その言い切りがみごとである。さりげない心遣いは人間に対しても同じであろう。

伝統的な文化風習をだいにした暮らしぶりが目に浮かぶ。

落椿姿そのまゝ源氏山

仲田利子

椿の花の散るときは花全体で落ち、「姿そのまま」なのである。椿の名所は京都や伊豆大島などが知られている。鎌倉もその一つである。「源氏山」がかつての栄華を物語る。

指揮者なき蛙の輪唱千枚田

外村紀子

「蛙の輪唱」に推敲のあとがうかがえる。「蛙の合唱」ではおもしろ味に欠ける。「指揮者なき」の措辞も、蛙の鳴きしきる様子が鮮明に浮かぶ。一斉に鳴きそろう様に、指揮者がいるようだと思つたのだ。「千枚田」を演奏会場として。

透き通るひひなの面の愁ひかな

高原和子

雛人形は作られた時代や作者によつて、その表情にちがひがある。ふくよかであったり細身であったり。それぞれである。「透き通る」ほどの白い「ひひなの面」ゆえに、かえつて何か「愁ひ」を感じた。それは自身の愁いかも知れない。

自然光注ぐ新駅初桜

小駒さち子

自然光を利用して広い吹き抜けを設けた「新駅」。咲き初めた桜が駅頭からもホームからも見える。「新駅」の明るさと「初桜」の初々しさが呼応している。開放的で和やかな新

駅。木の香漂う魅力的な駅に一度は行ってみたいものだ。

一 輛車夕焼の裏へ着きにけり 関根千恵

「一輛車」というから単線の鉄道にちがいない。田園を抜け里山にさしかかる。夕どきの慌しさもなく、ゆつくりと終着駅に着いた。「夕焼の裏へ着きにけり」が郷愁をさそう。「夕焼の裏」とは、と思ひ巡らすのも楽しみの一つなのだ。

美味しいと言はれて弛む春の宵 鈴木香音子

焦点は「弛む」である。何が弛んだのかは書かれていない。当然、「春の宵」が弛むはずがない。顔がゆるむ。口元がゆるむ。緊張がゆるむなど想像に任せられる。口数の少ない夫の言葉であろう。それはもう一番うれい言葉なのである。

あれだけがこれだけになる嫁菜飯 遠藤人美

二通りの解釈をしてみよう。まず、いっぱい摘んできたはずなのに「嫁菜飯」にしたら「これだけに」なってしまったと。もう一つは、あんなに多かったものが食べ尽くされて、「これだけ」になったと。いずれにしても楽しい句である。

深呼吸春の便りは確かなり 田村福美

〈風さへも春めくものとなりけり〉と、稲畑汀子は詠んでいる。人それぞれに春を感じる。戸外の風のやわらかさに

思わず「深呼吸」をした。それで確かな春を実感したのだ。

なにびとか会話ひそひそ春の闇 落合和枝

宵の静かな時間。外の通りからかすかに話し声が聞こえてくる。「なにびとか」と聞き耳をたてたのだろう。しかし、聞きとれない。「ひそひそ」のもどかしさが「春の闇」に合致し、そこに春ならではの感情をこめて趣をかもしている。

むねあげののりとをぬうてつばめくる 山下ユリ子

上棟式の最中。神主のお祓いを受け、家の繁栄と安全を願っていると、不意に「つばめ」が飛んできて柱の間を抜けていった。玄関の中に巣をつくる燕。巣づくりの下見に来たのかも知れない。ひらがな表記が「のりと」のようにみえる。

縁側に媪座しをり桃の花 岡田芳春

「桃の花」の華やかには、桜とはちがいが、落ちついた奥ゆきがある。ひな祭には欠かせない。暖かい日射しに「縁側」へ出た「媪」。ゆつたりとした時の流れを楽しんでいる。品のよい穏やかな表情が「媪」の表記に表わされている。

若草や風と光に初々し 湯浅節子

萌えてたばかりの「若草」。そのみずみずしい緑の光に心地よい風から「初々し」さを感じている。「切れ」のない形、たとえば「若草に風と光の初初し」とすることもできる。

大村節代 選

鼓  
笛  
集

下闇を抜けて開ける三方五湖  
片蔭や鯖街道の名残宿  
名水を汲む人絶えぬ苔の花

岡田宣子

調律のピアノ音はづむ夏の午後  
バッハ弾く古雅に流るる夏の風  
「悲歌」奏すギターに魅せられ夏の夕

山岸久美子

終活やすこし派手目の更衣  
三代が横一列の田植かな  
はだしの児地産地消の田植かな

菅原卓郎

園児の服に勲章のごと蝸牛  
時の日やティー飲みごろの砂時計  
袖の花の蛹のいろは緑色

梅澤輝翠

水吸うて豆ふくよかや梅雨の朝  
組板を緑に染むる夏蓬  
走り根の苔の緑や梅雨ながし

池田珪子

万緑や日本列島一呑みに  
身の厚さ鯖鮓さすが鯖街道  
白靴の休む暇なしナースが来

西幅公子

叱られて一直線に川の夏  
渡月橋浴衣で歩く二人連れ  
茶を点つる利休の教へ夏あざみ

千坂平通

甥が繰るベントツの旅や麦の秋  
八ヶ岳眺むる山路夏が来る  
信玄の青葉に埋もる棒道よ

飯田忠男



## 鼓笛集作品評

大村節代

下闇を抜けて開ける三方五湖

岡田宣子

色々な慶事を折り込んだ「若狭句碑めぐりバスツアー」に参加した作者の三句。初めての若狭に行かれて、素直に若狭を見つめた銜いのない句に、共感した。三方五湖、鯖街道、瓜割名水公園と、程良く作者の感動が伝わる。

調律のピアノ音はつむ夏の午後

山岸久美子

調律師が時間をかけて、ピアノ調律をする。調律の終わったピアノは、寸分の狂いもない音が甦る。音はつむのフレーズに音を確かめるように気持ちよくピアノを弾く作者が浮ぶ。

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解）

加藤でん治

菖蒲湯の菖蒲刈る鎌研ぐ朝

菖蒲湯と言えば端午の節句。五男三女として育った私には一大イベントの一つだった。

私は兄と菖蒲や蓬を刈りに出る担当。

私は出かける前に鎌を研ぐ時が好きだった。鎌研ぎや包丁研ぎには無心になれるひとときがある。そのひとときが好きなのである。

この句が浮かんだ時も、その無心さ、昂揚感が思い起こされる。

終活やすこし派手目の更衣

菅原卓郎

派手目の洋服を、満更でもない、鏡に写る己が姿に悦に入る作者、終活だからと言い訳をしているが、いやあお似合いですよ。

# 俳誌望見 染谷風子

「鳴」

二〇二三年六月号 通卷六七四号  
主宰 加藤峰子 発行所 千葉県千葉市

昭和二十三年、田中次郎氏により創刊。

「いのちをほめ、かなしびを表白し、自然の中に生きる人間の総量としての俳句をめざす」がモットーである。

表紙裏に「且過亭逍遥」の題で元主宰伊藤白潮氏の二句が掲載されている。「鳴俳句会」のホームページに依れば、白潮氏は、昭和三十六年、通卷九十七号をもって休刊した「鳴」を昭和五十年六月復刊し、主宰に就任された方である。

鷺刺して植田鏡のわが故郷

草の根に蛇泳ぎつく創世記

巻頭の「野の色を」と題する主宰の十句より三句

野の色を顔に映して土筆摘む

梅東風や酔余の本音聞きそびる

春なれや短冊墨書のかすれ佳し

第一句、「野の色を顔に映して」の上五中七の措辞がすばらしい。第二句、観梅の席での戯れか、はたまた、藤原時平の讒言事件に想いを飛ばすは読み過ぎか。第三句、春爛漫の下、短冊に揮毫した句の文字がかすれている。やはり俳句の短冊は雄渾よりも、少し掠れて余白が感じられる方が良い。

以上三句は、何か平安王朝文学を思わせる句である。

名譽代表高橋道子氏の「フリージア」七句より三句。

ふらこを揺らすは風かたましひか

北窓を開けば入りぬパン屋の香

フリージア子に論されてゐて楽し

当月集（六月号は六月集の題になる）は、鳴俳句会の当月

集同人二十二名の計一五四句が掲載されている。内三句

色鉛筆削るつぎつぎ春句ふ 荒木 甫

余生にも欲しきときめき雛飾る 中山 皓雪

たんぽぽをよけてライトの守備につく 平野みち代

「鳴俳句」欄は主宰選である。上位入賞句より五句

手に探る郵便受けにある余寒 坂場 章子

おくびにも出さぬ負けん気雪割草 松林 依子

明日からは誰かの机卒業す 山内 洋光

櫛の芽澎湃として色付きぬ 原田 達夫

春帽子の阿弥陀と目深連れ添うて 石田 きよし

「鳴俳句」は、五句入選、四句入選、三句入選を合せ八十三名が投句し、主宰が内十五句を「選後余録」欄にて詳細丁寧に選評し、裏表紙に「羽音抄」として掲載している。いずれも鳴俳句会のモットーを具現化している力作である。巻末に『俳句四季』四月号に主宰が寄稿した一文が転載されている。それによると、長年石田波郷と深い交友があった創刊者田中次郎氏は生涯「鳴」同人であったようだ。

網野月を選

山紫集

もよもよと蚕豆を噛む待ち惚け

横山礼子

蚕豆の皮剥かず食ぶ人の居し

仲田利子

空豆の空似人体解剖図

原田秀子

旨味ギユツ焼いた蚕豆莢の山

鳴海順子

売れ残り蚕豆半値すねた色

杉浦理恵

蚕豆や弾ける少女ジャズダンス

南條さわゑ

蚕豆や二つ鐘鳴るのど自慢

檜鼻ことは

蚕豆の好き嫌ひあり親子かな

西浦千枝子

蚕豆の雲に近しや風のうた

池田雅夫

昆虫の畑に群るるやはじき豆

西幅公子

太陽の電波を受くるはじき豆

保坂翔太

蚕豆を剥いて母の手浮かぶ夕

野口和子

そら豆や一皮剥けて湯屋の番

渋谷さいち

蚕豆や客満員の縄電車

近藤徹平

蚕豆の好きなあなたの指を咬む

石田慶子

そら豆や受胎告知のあさの風

池田珪子

以上特選



蚕豆や過保護の二人出航す	野田静香	仲見世の先づ蚕豆を買ひ求む	松本光子
ふつくらと蚕豆茹でる益子焼	野村美子	蚕豆やひと日の幸がひと粒に	丸屋詠子
蚕豆を酒のつまみに父笑顔	畑宮栄子	はじき豆素振り百回日矢弾く	丸山マスマ
蚕豆よお空にほふる口の中	樋口元美	茨剥けば神子在すかにはじき豆	宮崎チアキ
「露地物」と声かけられてはじき豆	日高道を	蚕豆のカプセルホテル影三つ	本橋稀香
焼き蚕豆ぬくぬく布団より出でぬ	福田千春	弾みたる「おお蚕豆か」夫の声	森 和子
運を天に任せ蚕豆弾けたり	藤澤喜久	蚕豆や嬰ころこるとよく太る	森川義子
そら豆のソラに口腔あけはなつ	曲淵徹雄	蚕豆や茨の真綿に包まれて	森下美智枝
多胎児にあふるる個性はじき豆	正木萬蝶	はちきんは酒豪で多芸はじき豆	森美枝子
はじき豆男無口な家系なり	町野広子	もぎたての茹で蚕豆や初初し	山岸久美子
蚕豆やほつくりあまき塩加減	松井由紀子	喜喜として蚕豆さやをとび出せり	山下ユリ子
蚕豆や塩味にして更に青	松宮保人	蚕豆の皮は剥くのがよいのでは	山中いちい

性格の異なる双子はじき豆	湯浅 和	ほつくほく備長炭の蚕豆	梅澤輝翠
初物の蚕豆ゆでて父を待つ	横山君夫	蚕豆を莢ごと焼けり白ワイン	梅澤佐江
蚕豆よ黒ミサイルを打ち落とせ	秋谷風舎	反抗期十四歳のはじき豆	大塚茂子
幼日の恋は実らずはじき豆	青木鶴城	蚕豆の乳母日傘や莢の内	大場順子
蚕豆や過保護な母の塩加減	新 曆文	父の皿へと子の手が伸ぶるはじき豆	岡田宣子
蚕豆に小さき唇ありしかな	阿部幸代	蚕豆の青さ幼の燥ぎやう	加藤でん治
はじき豆薩摩切子の盃ふたつ	荒井俱子	莢裂けば三つ子蚕豆顔を出し	熊倉千重子
蚕豆の皮厚くして面の皮	飯田忠男	蚕豆やお伽噺と赤ワイン	河野はるみ
蚕豆や夫は下戸で妻上戸	石川理恵	蚕豆や莢ごと焼きて新メニュー	小駒さち子
蚕豆剥ぐ昭和の母の手の厚き	井上燈女	蚕豆や青春といふ青き貌	越田栄子
蚕豆の莢の囁き故里へ	上戸千津子	蚕豆や並べしジョッキになみなみと	後藤綾子
蚕豆や決まつた順にクレヨン並べ	内田恵子	蚕豆の莢裂く音に夕べ来て	小林京子

蚕豆やさやと豆との量くらべ

榊原聰子

突出しは蚕豆三つ神楽坂

染谷風子

家飲み中空豆好きの媪気を使ふ

佐々木史女

晩酌に並ぶ蚕豆寿老人

反町 修

はじき豆看板娘福々し

笹本啓子

蚕豆や寶石箱をそつと開く

高橋満耶子

蚕豆や媚らぬままに天を突く

篠崎紀子

そら豆の輝く莢や稚の頬

武田重子

蚕豆は天に向かひて実るなり

嶋田洋子

蚕豆を炊き込む飯も塩の味

田中章嘉

蚕豆や笑ひ上戸は母ゆづり

下川光子

蚕豆や夢中になれぬこと多し

飛永 鼓

蚕豆や双子の婆の隠し事

菅原卓郎

空豆の息もしつとり宅配便

菅原真理

莢付きの焦げし蚕豆居酒屋風

鈴木藻好

蚕豆の寝床の型の深きこと

鈴木玲子

蚕豆も並びて夕餉風通ふ

関谷多美子

家族五人蚕豆食べし殻の嵩

瀬戸雄二郎

☆

☆

## 山紫集作品評

### 網野月を

もさもさと蚕豆を噛む待ち惚け 横山礼子

上五の「もさもさ」のオノマトペが効果大である。勿論、直近の動詞である「噛む」を修飾する副詞的な性格を有しているのだが、座五の「待ち惚け」にも繋結しているようだ。というよりも座五の「待ち惚け」を誘引しているように読める。筆者にとつて、「蚕豆」は決して「もさもさ」な触感を感じることは無いのだが、新味のあるこのオノマトペには俳句的表現の妙を感じる。

空豆の空似人体解剖図 原田秀子

発想の飛躍がこの句の心情であろう。上五の「空豆」が「人体解剖図」に飛躍しているのである。「空豆」は発芽して双葉を出すので、「豆自体を二つに割ればやがて双葉になる相似形の部分に割れる。その相似形の双葉になるだろう部分」を「空

似」と言い、句の後半で一気に「人体解剖図」に飛躍する。「空豆」の形を形容して扁平な腎臓型をしているという譬えもある。そうした連想からの飛躍なのかも知れない。

売れ残り蚕豆半値すねた色 杉浦理恵

売れ残りだと言つても「蚕豆」の色つやが悪くなつていのではないだろう。商品の色つやに遜色があれば売れ残りでは済まない。昨今の賞味期限表示のための売れ残りであろうと推察するのである。中七の「蚕豆半値」はむろん助詞が省略されたものであり、中七と座五の間に切れがあると解した。座五の「すねた色」は作者の目からそう見えたということなのである。

蚕豆や二つ鐘鳴るのど自慢 檜鼻ことは

取り合わせの技法を用いた句の妙味が發揮されている。「蚕豆」の庶民的な感覚やその形状の愉快さなどが、座五の「のど自慢」にも、そして鐘二つという程の良い表現にも共通している質感を大いに醸し出している。作者は茹でた「蚕豆」をつまみながら日曜日のお昼の「のど自慢」を楽しんでいるのである。

蚕豆の雲に近しや風のうた 池田雅夫

風に揺れる「蚕豆」の景を叙している。「雲に近しや」が何ともその通りなのである。「蚕豆」は背伸びしているように莢が直立して付くのであって、決して天空の雲の高度に及ぶわけではないのだが、「蚕豆」の草全体の中で、最も上に位置しているということなのであろう。「雲に近しや」は文学的表現なのであって、作者の詩的表現の巧みさである。

太陽の電波を受くるはじき豆 保坂翔太

「はじき豆」の莢を実らせた形状を上五中七の「太陽の電波を受くる」の表現に託している。単なる形容に終わる修飾ではなく、太陽光に基づく稔りともとれるし、まだ人類の知り得ない自然界の不思議を探り出しているようにも解せる。

そら豆や一皮剥けて湯屋の番 渋谷きいち

この句の飛躍も素晴らしい。「そら豆」と「湯屋の番」を結びつけてしまっている。全体は庶民的な感覚が統一感を作っているのだが、やはり中七の措辞の効果が大きいだろう。上五の切れ字「…や」で切っているのが、中七座五の意味合いを季語が担保しているという作りになっている。中七の「……て」は接続助詞であるので原因結果を結びつける効果がある。この句の場合、その原因結果に無理が無い分、スムーズに読み手の理解に繋がっている。湯屋番はやはり「一皮剥けて」いる

くらしいの落ち着きが無くは務まらないからである。

蚕豆や客満員の縄電車 近藤徹平

もちろん「蚕豆」自体の形状も「縄電車」に似ているようなところもある。が譬喩であるとしたら詰まらないのだ。つまり眼前の「縄電車」を叙しているのか？メモリーの中の「縄電車」を思い起こしているのか？多分、後者であろうと筆者は推測する。「蚕豆」を食べると、頻りに子供の頃の楽しくも切ない「縄電車」の思い出が呼び起こされるのである。

蚕豆の好きなあなたの指を咬む 石田慶子

「指を咬む」はただ事ではない。大いに色っぽい話なのか、喧嘩をして逆襲したのか、作者に伺いたいところである。「咬む」の文字を当てているところから甘噛みに近く、多分に痴話のように推測した。もしかしたら、飼い犬の仕業かも知れない。

そら豆や受胎告知のあさの風 池田珪子

上五には季語「そら豆」を切れ字「……や」で提示している。「そら豆」がこの句の本季語であって、「受胎告知」は本来のキリスト教の聖告際のそれを指示してはいないだろう。妊娠の報に接して洒落た言い方をされたのではないかと、勝手に想像した。「あさの風」が、何とも清々しい心地を演出している。

## 句集喝采

## 曲淵徹雄

### ◆廣瀬悦哉「里山」

角川書店

著者略歴 昭和三十四年山梨県生。平成二年「雲母」入会。平成五年「白露」入会。平成十八年「白露」同人。平成二十五年「郭公」同人。

著者の第一句集『夏の峰』に続く第二句集で、平成二十二年から令和四年秋まで十三年間、三五二句が収載されている。句集帯文に、井上康明氏による鑑賞句「炎天に出てゆけといふ旋風」。著者あとがきには、自然と人間の共存を大切と思う気持ち句集名に込められていると記す。

寒晴や金の鯨金の反り  
花の冷石に楔を打ち込めり  
山の水振つて草刈鎌を研ぐ  
産土のせせらぎ足に閑古鳥  
秋の鳶右旋回に甲斐の国  
第一句、第三句、簡潔な力強い描写の句。第四句、第五句、大切な産土、山里の句。

仮面の女がミモザの花抛る  
先に目を反らしたのは青大将  
ぢりぢりと明日を待てり黒葡萄  
天の川たくさんの夢聞いてゐる  
句集帯文に記されているように、伝統に根差して果敢に今を描いている句。今後、伝統の根の上にさらに新たな句風を呼び起こされるのではと思う。

### ◆名取光恵「羽のかるさ」

ふらんす堂

著者略歴 昭和二十二年山梨県巨摩郡生。昭和五十九年「濱」入会。昭和六十二年「濱」退会。平成二年「アカシヤ」入会。平成六年「百鳥」入会。平成十六年「百鳥」退会。平成十七年「いには」創刊同人。平成三年アカシヤ賞準賞受賞。平成二十四年には同人賞受賞。平成二十六年俳人協会俳句大賞受賞。平成二十七年苦小牧市文化賞受賞。俳人協会会員。北海道俳句協会会員。

著者の第一句集『水の旅』上梓後の十五年間、五〇一句の句集である。村上喜代子氏の「序」と著者のあとがきには、著者が病む身をもって、俳句を力に前向きに生きる思いが記されている。

山霧を風のさらひぬ蝦夷黄菅  
眼を閉ちて語るアイヌ史雪螢  
たば風や丘に多喜二のデスマスク  
葉ざくらの道をナースと遠まはり  
試歩一歩青葉の風の新しく  
第一句、第三句は、北海道に住む著者ならではの句。第四句、第五句は、病む身を受け入れて、前向きに詠まれた句。  
子授けの宮へ百段轉れり  
残り鴨湖の光に身を預け  
あす咲くと桜の風の句ふかな  
梨一つ届けにきたる三輪車  
これからも心を解き放つ句を詠んでいかれますように。

# 俳句

9月号  
予告

8月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)®

特別作品 小川軽舟・井上康明・恩田侑布子

選句力は作句力

## 選句を鍛える

多くの現場から

### 大特集

総論 選句とは何か……  
現場レポート 公募の選／結社の選／句集の自選  
選句指南 選句をしてみる

## 追悼 大石悦子

追悼エッセイ／人生と作品／100句選／一句回想

好評連載

山本健吉の歲月……井上泰至  
蛇笏賞の歴史……坂口昌弘

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊 俳句界

2023年9月号

引き継がれる精神  
特集 結社の理念

「藍花」 谷中隆子  
「運河」 谷口智行  
「耕」「Ko」 加藤耕子  
「辛夷」 中坪達哉  
「鳴」 加藤峰子  
「蒼海」 堀本裕樹  
「松の花」 安原 葉  
「窓の会」 坪内稔典  
「門」 鳥居真里子

クラビエ 俳句界NOW 柴田多鶴子  
特別作品21句 石寒太「炎環」

秋の食べ物詠む

伊藤伊那男 小島健 中西夕紀  
宮崎斗士 相子智恵 如月真菜

追悼 黒川悦子

○50句セレクション 本井英  
○追悼文 稲畑廣太郎 本井英  
山田関子 半田美永

\*セレクション結社「地襖圈」石倉夏生

私の一冊 和田順子「繪硝子」

対談 佐高信の甘口で「ソニン」二子ハ！  
前田佳子（日本女医会会長）

「俳句界」投稿欄 一流選者14名！  
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 文學の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

翻る結社の旗や早苗月  
 佳人ゐて垣根乱れず鉄線花  
 父の日の社員父なる顔ばかり  
 社まで鴨のお通り青葉風  
 社長らは向かひの座敷涼み茶屋  
 子会社へ出向呷る生ビール  
 庭石のぬれて夕べの鉄線花  
 鉄線花てせんか姑ぢのしがらみなつかしむ  
 お香水を戴く社青時雨  
 再起期す社名変更風薫る  
 軍隊となるな会社よ冷房裡  
 社殿には田空仏よ夏兆す  
 女盛りをやもめでと鐵し鉄線花  
 黒光りの社の薨雲の峰

境延昭  
木和子  
和子報

マスミ  
 京子  
 順子  
 和葉  
 舍人  
 理恵  
 喜恵  
 以上特選  
 由紀子  
 マスミ  
 喜恵  
 拓真  
 節代  
 延昭  
 はるみ

## 第二例会（東京）

夕暮の町屋にそよと鉄線花  
 山開き見ゆれど遠き奥社  
 職辞して緑陰の寺社巡るかな  
 てつせんの慮おぼりて二三輪  
 鉄線花スーツ姿のハイヒール  
 身の内に聖女と悪女クレマチス  
 口づけせむと寄する顔クレマチス  
 お師匠は面長美人鉄線花  
 通学班の集まる所鉄線花

山中みどり  
青木鶴城

京子  
 徹平  
 稀香  
 舍人  
 チアキ  
 順子  
 理恵  
 和葉  
 和子

## 第三例会（東京）

案ずれど返信一行明易し  
 ちさき蟹マイムマイムの横走り  
 隣人の目に力あり風薫る  
 また夢は片恋のまま明易し  
 短夜や為すこともなく爪を切る  
 さざ波に遊ばれてゐる小蟹かな  
 ルビー色に塗る足の爪明易し  
 お手上げの蟹を追ふ子の好奇心

五明  
曲淵徹雄

以上特選  
 峰雄  
 いちい  
 士史  
 竺仙  
 リコ  
 敏江  
 みどり  
 鶴城  
 昇  
 萬蝶  
 順子  
 理恵  
 徹雄





——以上特選

切通し抜けて千尋の風薫る  
青葉冷え太宰治の入木の地  
合宿の気合響くや夏木立  
梅の実や妻は梅酒に嫁はジャム  
吹き抜くる青葉の風や切通し  
青葉風へ投げ込む赤きフリスビー  
青葉闇スマホのスリラー指で練る  
山青葉「右ぜんくわうじ左いせ」  
理恵 徹夫 萬蝶 星歩 康世 順子

### 第四例会 (浦和)

境延昭  
石井喜恵 報

薫風に法堂窓を開け放つ  
棚田向くホームのベンチ風薫る  
守宮鳴く窓に化石のやうな貌  
古民家に座敷わらしと守宮かな  
天井に甲賀の如き守宮かな  
溪流をまたぐ吊橋風薫る  
風薫る盆栽園の異邦人  
若者の野良着健やか風薫る  
寛治 昇 延昭 翔太 曆文 玲子 修

——以上特選  
薫風や笑顔の囲む泣き相撲  
山頂の万歳三唱風薫る  
農具小屋主貌して守宮棲む  
同居して表札ふたつ風薫る  
板壁にびたり静止の守宮かな  
風薫る竿を片手に溪流へ  
でん治 延昭

——以上特選

玻璃越しの守宮夜陰を侶として  
風薫る時報知らせる童歌  
風呂敷に包む教科書守宮出づ  
学食のおすすめランチ風薫る  
梅澤佐江 報  
河野はるみ

### 第五例会 (浦和)

夜が好き酒も大好き雨蛙  
青芝やかつて寝転び夢語る  
舞ふやうなピッチャーの技青き芝  
呼ぶやうに応ふるやうに雨蛙  
つまづけばいたはり顔の雨蛙  
青蛙日照雨やさしき午後となり  
はるみ 宣子 美佐尾 水尾 理恵 佐江

青芝や胸の高まる大試合  
青芝をわたる夕風身のほぐれ  
夏芝の光の布団しとねとす  
青芝の光り輝く吾が狭庭  
青芝やゴルフボールの空を割く  
雨蛙一步も引かぬ面構へ  
雨芝や今日は五分刈り三歳児  
雨恋うて大海恋うや青蛙  
以上特選 宣子 玲子 理恵 水尾 美佐尾 義子 はるみ 佐江

### 若松例会 (京橋)

つばめ魚遠流の島を恋ひて飛び  
飛魚や己が進路に迷ひなし  
石田慶子 報  
正木萬蝶 佐江城

——以上特選

万緑の新東名を水明旗  
風を追ひ波を追ひ越しつばめ魚  
飛魚の軌跡見てゐる数学者  
飛魚とんで鋼の色の海しぶく  
白亜紀や海を選びしつばめ魚  
飛魚や零戦のごと鮮烈に  
世界記録に飛魚の挑戦ひれ全開  
そんな料簡だから駄目なの蚊食鳥  
先達の句碑の数多や若狭首夏  
少年の夢はベガスとびの魚  
故郷の海よ光よ飛魚食めば  
大皿に盛る普茶料理夏館  
飛魚はね似たやうな雲湧いて跳ね  
飛魚の銀鱗光る船先かな  
海の青飛魚の碧陽は真上  
夏の夕皿鉢料理で持て成され  
以上特選 理恵 京子 鶴城 佐江 千春 マスミ 慶子 星歩 ひろこ 萬蝶

### 関西例会 (大阪)

街中をサンバ席巻神戸初夏  
十一や馬欄に干さるる作業服  
下り船くらはんかとして行々子  
砂の城汀にくづれ梅雨の月  
鳴き過ぎて口中真つ赤行々子  
黒南風や出航を待つ模型船  
明滅はワルツのリズム恋螢  
以上特選 理恵 京子 鶴城 佐江 千春 マスミ 慶子 星歩 ひろこ 萬蝶

森本早苗 報

梅雨晴れ間千載一遇コウノトリ

——以上特選  
早苗

葭切や舟へ敷き込む小座布団  
時の日や五感の動き遅れ気味

玲子  
千津子

訪ねゆく蕪村の里や葭雀  
葭切や護岸工事の着着と

ゆら女  
洋子

復活の嫁入り舟や葭雀  
逃亡者潜んでみさう木下闇

和子  
道子

一番星見つけはしやく子行々子  
葭切や丈夫になると赤子泣く

千枝子  
千世子

梅雨晴れや竿売りの声風に乗る  
葭切や元気な園児はきはさと

満耶子  
さわゑ

湖暮れて声一段と行々子  
——

嶋田洋子  
早苗

## 昔話あれこれ 29

### 二皇子、志毘臣を誅殺

さて歌垣の明けた翌朝。意祁命・袁祁命は、「朝廷に仕える人々は、朝は朝廷に来るが、昼には志毘命に媚びてその門前に集まっている。このままでは駄目だ。今なら志毘は寝ているだろう。また門前

には人もおるまい。今でなくては志毘を滅ぼすのは難しかろう。」と相談し直ぐに軍勢を集め、志毘の家を囲み、殺してしまった。

### 二皇子、即位を互讓

さて、皇位継承に当り、二人は互いに譲りあつた。兄の意祁命は弟の袁祁命に「播磨の国の志自牟の家に住んでいた時、あなたが我々の名を明らかにしなかつたら、天下を治めることが出来なかつただろう。あなたの手柄だ。私は兄であつても、やはりあなたが先に天下を治めなさい。」と言つて強い調子で譲つた。それで袁祁命は辞退出来ず、先に天下を治めた。

### 顕宗天皇

伊弉本別(いざほなべ)の王の御子、市辺(いちへ)の忍齒(しのは)の王の御子、袁祁(えんき)の石巢別(いしすまべ)の命が飛鳥の宮で天下を治めた。顕宗天皇である。天皇は石木(いしき)の王の女を后とした。子はなかつた。

在位は八年。

### 父王の遺体埋葬

顕宗天皇の父市辺の忍齒の王はかつて雄略天皇に殺され、遺体は地中に埋められ、盛土もされず、その所在が分からなかつた。

天皇はその遺骸を探していた。すると淡海の国の卑しい老女が

「王の亡骸を埋めた場所は、私だけが知つております。またそのお齒の特徴で確かめることが出来ます。」と申し出た。忍齒王は八重齒であつた。

天皇は民を動員して遺骸を探し、遂に発見した。蚊屋野(かやの)の東の山に御陵を造つて埋葬した。後に河内に改葬した。

そして都に帰ると、あの老女を召し、遺骸を埋めた場所を確実に覚えていたことを褒めて「置目(おきめ)〔よく見て置いたの意〕の老嫗(らうおん)」と名付けた。

そして皇居内に召し入れ手厚く慈しんだ。(つづく 丸山マスマ)

各地句会



若鮎句会 (浦和)

母の手の老いて滑らか百日紅  
海原や波しづかなる五月闇  
無住寺の屋根に被さる百日紅  
閉店の古書肆の屋号さみだるる  
チロチロとフリル重なり百日紅  
マンシヨンの隙間の家の百日紅  
集合の間に泳ぎ覚えけり  
手のひらの玻璃の集むる青葉光  
仄明かり人なき寺の百日紅  
煙突の送りの煙百日紅

芳春 香音子 紀子 季子 順子 稀香 拓真 月を 喜夫 鶴城

六弦 敦子 妙子 知子

白南風や竹林越しの禪の聲  
ガーリックライスを朝に南風  
につこりと化けて楽しいさくらんぼ  
郭公や木立に透けるサナトリウム

六弦 敦子 妙子 知子

白南風や海底蹴りし海女戻る  
河岸南風かもめのとまる錨網  
南方に眠る屍やまじ強し  
お化け屋敷や蚊取線香ひゆるるひゆる  
南風や蔓の行方を導きて

十三子 月を 鶴城 美智

柿の木塾 (浦和)

黒南風やひつくり返る玩具箱  
夏料理気取つて食ぶるおちよぼ口  
黒南風や海鳥たちの獵場かな  
沖暗し黒南風を衝く連絡船  
海の幸なる地元づくしの夏料理  
川風の程よく通り夏料理  
中庭に設への滝夏料理  
酔のもののおれこれ増ゆる夏料理

恵子 節代 章嘉 昇 水尾 かつ子 和葉 和子

円卓の会 (浦和)

万緑を駆けて駆けてや日本海  
運命に反逆の土や核桃忌  
翡翠や暖簾褪せたる峽の店  
夢に出よ会ひたき友の星涼し  
万物の息の始まる喜雨の朝  
翡翠や天は二物を与へ給ふ  
畦道を走る人あり喜雨来る  
憎からず梅雨の燕を憎からず  
半夏生我は自由な粗大ゴミ

輝翠 修 翔太 静香 拓真 京子 道を 月を 鶴城

六弦 敦子 妙子 知子

俳句の手ほどき (岩槻)  
七変化主演女優の妖しき目  
梅雨晴間沖に白帆が花のごと  
開け放つ座敷華やく半夏生  
汗匂ふ坊主頭の柔道部  
城主めく天守の男夕焼雲  
竹皮を脱ぎ琅玕の穂の澄めり  
この庭は俺が主と蝦蟇  
ハンカチの染工房の体験会  
梅雨の月昭和歌謡を久に聴く  
幕間の梅雨の晴間や町芝居  
夏雲を仰ぐ老松主顔  
じわり効く親の苦言や茄子の花  
蚊遣豚陸言聴いてゐたりけり

徹平 水尾 義昭 延昭 翔太 佐江 忠男 美子 桂子 幸代 久美子 卓郎 かつ子

ミモザの会 (横浜)

夏の夕青き尾長の横切りぬ  
一年の先の楽しみ実梅もぐ  
母さん似父さん似かな鴉の子  
長子なれば我儘こらへ鴉の子  
鳥の子ハンガーの巢に生まれしか  
潮騒に負けず声張る鳥の子  
梅の実やまろき心地で淡々と  
梅青し少年に恋芽生えたり  
やさしさは青梅を拭くたなごころ

玲子 亜弥子 慶子 萬蝶 美千子 詠子 栄子 史子 千春

たかなな俳句会 (川口)

新人生一息つける夏至の頃  
来てみれば風まつたりと夏至の海  
徴ごときには恐るるなかれ風呂洗ふ  
万歩計四桁示さず夏至の夕  
起重機の伸びきつて居る夏至の夕  
柗席の足の所在や夏芝居  
山鳩の声透き通る夏至のひる  
相席の旅人と見る二重虹

神戸大池句会 (神戸)

時の日の天文ドーム刻きざむ  
身を焦がし飛ぶほうたるの冷たさよ  
我が町のかはたれ時を不如帰  
光が丘俳句教室 (東京)

和歌山水明句会 (和歌山)

緑蔭の画布いつばいに天守閣  
板長の高下駄の音梅雨湿り  
合歓の花救世観音への道標  
代田水流れを交ふる三人衆  
クルーズ船は巨大マンション梅雨夕焼

謙一  
のり子  
福美  
小麦  
小義子  
鶴城  
水尾  
静香  
玲子  
千津子  
早苗  
はる  
理恵

絵筆とる好物の枇杷届きたり  
巡り来る季節の速さ夏燕  
梅雨巨船あさぎの煙を吐きて発つ

新樹の会 (浦和)

白鷺の鳴けば怪しく動く頸  
客間から見ゆる白鷺青さ空  
白鷺や孤高の白を際立つる  
遠雷や話題途切れぬ馴染み客  
賓客をまねてなす離宮夏の宵  
剣客をまねて瓢箪古浴衣  
墨客と呼ばれたき日や冷奴

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

妃殿下の少しななめの夏帽子  
草笛やお古の膝にアツプリケ  
鱧釣や羽田はかつて漁師町  
草笛や袖の香匂ふ懐古園  
天守の統ぶる四方の山脈流れり

野ばらの会 (浦和)

ミシン踏み葵も揺るる窓辺かな  
山小屋のデッキを囲む立葵  
白靴や躓き癖の直らずに  
「ヨシノヤ」の白靴からしコンサート  
学童の部屋を覗き見立葵

さわゑ  
洋子  
迪代  
徹雄  
平通  
道吉  
風子  
鶴城  
延昭  
美枝子  
俱子  
俊晴  
昇

蘭の会 (浦和)

縁側の汁かけ飯や田植時  
縁側の点描続く蟻の列  
抱きつきしヒマラヤ杉や夏帽子  
夏帽をはずにかぶりて再会す  
倍速で駅へと少女夏帽子  
夏帽子選ぶ母娘の背中かな  
夏帽はお洒落の道具かも知れぬ  
登校の子らに真白な夏帽子  
風の息空に飛ばすや夏帽子  
ワンコイン・ランチをゲット桐の花  
夏帽子脱ぎて髪振るあの仕種  
口角を無理矢理さりり夏帽子

水明つくし句会 (大阪)

さみだれて水輪映るふたペかな  
バス停に話の緒継ぐ濃あぢさゐ  
梅雨寒や携帯電話電池切れ  
拾はねば後る髪引く落し文

野菊の会 (与野)

今日曇天ハイビスカスがぐらつかす  
香水のわづかただよ試着室  
遅くとも私の歩幅青田風  
高原の列車空へと麦の秋

風子  
まりこ  
珪子  
比早子  
小麦  
夕峰  
風舎  
悦子  
さよ子  
月を  
鶴城  
京子  
智恵子  
人美  
洋子  
ゆら女  
美代子  
和子  
清子  
光子

山茶花 (浦和)

片蔭を姉に譲りて銀座の歩

鳴き声でそれとわかりし四十雀

片蔭を一人じめして木のベンチ

水明鬼石句会 (鬼石)

バナマ帽マフィアさながら老紳士

青空や夏ウグイスの声しきり

旋回し巢立ちうながす親つばめ

鶴川山百合句会 (町田)

この薔薇を全部煎じりや惚れ葉

七面鳥の柄のシャツ着てバラ抱く

尺取りの行き止りからの自由かな

白薔薇を抱きし胸のつめたさよ

「私癌なの」知人三人夏の雨

薔薇の園額を上げてねスマホから

シャツ纏ひつく体軀ほれば緑雨かな

緑雨に佇むペコちゃんもサトちゃんも

黄バラ好き嫉妬するのいいじやない

老優の語りシャンソンカフェに薔薇

若狭水明会 (若狭)

足元より雉飛び出し明日は吉

移住の娘新茶点てゐし一軒家

裏山の緑迫りて夏さざす

思ひ出を醸す新茶の力かな

新茶汲む母の手先の黒きこと

茶所の富士借景に新茶買ふ

夏めくや硝子の皿のカルパッチョ

夏めくや動めく物の田に山に

惱ましき「ウ音便」なり新茶汲む

古茶新茶苦勞を生きた母の皺

幕下りて暫し新茶の薄緑

夏めく日母の鼻歌聞こゆ庭

さざきサークル (浦和)

滴るも噴くも大地の息遣ひ

滴りや山路に出会ふ若き僧

億年の地よりこぼれて滴りぬ

滴りの暗きに在す石仏

おみくじも販売機にて夏祓

大祓明日在る事を疑はず

秩父嶺に太古の地層滴れる

青葉の会 (浦和)

古家電つぎつぎ故障梅雨深し

古井戸を囲むどくだみ十重二十重

雨上り古利の庭の七変化

沈黙の萍沼の主となり

萍を掬ひ両手に余りけり

鼓

祥子

保人

和風

郁子

白鷺

登美江

八重子

ことは

友夏

昇

光子

和子

啓子

和枝

俱子

和子

生ひ茂る古道の峠風涼し

ホールインワンの先客蝸牛

萍の小花にきつと妖精が

りそな俳句会 (浦和)

予報士の端切れの悪さ走り梅雨

梅雨晴れや功德を知る句碑巡り

梅雨晴れ間ペダル一気に踏み込んで

見送りは祇園の雨や夏料理

五大堂白さも淡き梅雨の月

自若たる楠の風格梅雨夕焼

夏料理に一言添ふる若女将

珊瑚の会 (浦和)

遠景に水車のまはる夏邸

夏館しづまり返つてゐる鉄扉

西方の晴れて止む雨遠郭公

夏館螺子を巻き足す大時計

床の間の掛軸を替ふ夏館

床の間に武具を飾りて夏館

鏡の間に写す総身や夏館

山よりの風も過客の夏館

古時計今日も音する夏館

足湯して遠郭公の輿飛驒路

揺り椅子に聴きをりし父遠郭公

ドラキュラの隠れてゐるよな夏館

洋子

和子

輝翠

寛治

久美子

建治郎

道を

曆文

マスマ

雅夫

恵子

史代

広子

和子

和葉

かつ子

喜恵

マスマ

水尾

昇

光子

節代

皇月の会 (浦和)

卯の花腐し入歯を曲ぐる麵麩の耳  
月と戯るる神社の庭の濃紫陽花  
世を忍ぶ恋よ四葩に夜の雨  
只見線全線通り夏帽子  
五月来て精氣賜る誕生日  
列に居る名越の祓夕陽さす  
梅雨湿り気怠き巫女の社務所かな  
父の日やすこし加筆の遺言書  
青芝やホテルの庭の白き椅子  
父の日や血圧計が新しく

芙蓉句会 (浦和)

時めくや浅瀬ひかりて鮎走る  
歳時記の手垢親しむ梅雨じめり  
尺蠖の何を思ひて往きまどふ  
十三回忌仏好みの夏帽子  
弄られて尺蠖つひに枝になる

櫻蔭句会 (浦和)

立てし筆蒼凜々しき花菖蒲  
白靴や赤児ふらふら一歩二歩  
川沿ひに一列黄なる花菖蒲  
幾筋もの雨の向かうの花菖蒲  
大奥の興宴なるや花菖蒲

山菜 更穂 光代 珪子 順子 紀子 静香 曆文 美佐尾 さいち  
正子 道子 税子 仁 美子 行雄 公子 久美子 由紀子 真理

水溜り白靴ひよいと飛び跳ぬる  
白靴の演武太極拳大会

ぐいと漕ぐ触るる潮来の花菖蒲  
白靴に鯖街道の黒い土  
せせらぎの音にはほゑむ花しやうぶ  
白靴を野路に踏み入れ明日香村  
蛸 蛸 の 会 (浦和)

梅雨冷やガレのランプのあたたけし  
梅雨寒やふんはり焼けたパンケーキ  
ひめさゆり自生を誇り村おこし  
ささ百合は宙百合となりきぼう旅

病院の会計待ちや梅雨寒し  
ヒロシマに集ふトップや百合香る  
UFOの通信傍受早屋  
梅雨冷や再配達票濡れてをり  
傍惚れの人の所在や夏夕べ  
抱へたる鉄砲百合に咽せかへる

あゆみの会 (浦和)

はじき豆薩摩切子の盃二つ  
もうなれぬ世話女房やはじき豆  
空豆を茹でて待つ間の手酌かな  
点滴台押して廁へ夏の宵  
麻酔から目覚めうつろや青葉闇  
店長いち押し蚕豆並ぶ特売日

美子 多美子 茂子 美智枝 千恵 幸代 さいち子 ひさの しろく 元美 風舎 朝香 礼子 月を 鶴城 宣子 俱子 啓子 山遊 和子 藻好

芽吹句会 (浦和)

修善寺の丹の橋けぶる五月雨  
さみだれや五百羅漢の目に涙  
夏柳水面に映る築地堀  
時の日や加速の日々となる八十路  
時の日や鳴くよ茶房の鳩時計  
銃後とて開墾せし地芝青し  
白々と明くる窓辺や五月雨  
じやじや馬を地で行くをんな夏の終

櫟の会 (浦和)

短夜や東雲ほのか茜さし  
水煙あげ滝の底から魔女の声  
滝垢離の行者の気迫水しぶき  
麗人も滝の行者に早変わり  
短夜や「も少し生きよ」と父の声  
音も無く一枚岩を滑る滝  
短夜や未完の一句如何にせむ

雛の会 (浦和)

六月やガードマン立つ宝石店  
玉響の日に透くる葉や梅雨晴間  
栗の花垂れて重たき夜を匂ふ  
花栗や少年一人坊泊り  
六月や薄荷を活けてレモンティー

玲子 富子 久美子 千重子 ひろこ 千重子 道を かつ子 朋子 裕誌 克之 富子 文子 千重子 喜恵 チアキ 燈女 輝翠 佐江

水明熊谷句会（熊谷）

ゴンドラの一直線に夏の山  
 田植機の夫婦に道を譲る朝  
 田植機で緑の化粧水光る  
 名画座のひたる余韻やソーダ水  
 夏の山画布十号に描き切れず  
 苗植機水面の雲をゆらしゆく  
 夏の山色を深めて鬢正す  
 田植終へチャグチャグ馬こ鈴の音  
 りんどう俳句会（浦和）  
 父の日や家族挙りて回転寿司  
 庭園の飛石つなく蟻の列  
 行く道は真一文字に麦の秋  
 飴こぼす庭に蟻呼ぶ独りつ子  
 放牛の百頭はめて青野行く  
 鈍行の夜汽車の窓に夏の星  
 一匹の蟻の行方を追ふ幼  
 パソコンの画面横切る迷ひ蟻  
 特上の鰻重を取れ父の日は  
 父の日や遺愛の碗に茶を点つる  
 若枝句会（浦和）  
 花菖蒲杖つく二人見え隠れ  
 句会入りあらため臨む花菖蒲

栄子 徹平 正行 卓郎 風子 燈子 茂子  
 利太 翔太 寛治 弘夫 君夫 まりこ  
 順子 風子 卓郎 徹雄  
 みどり 泰生

漆黒の闇の戒壇寺の梅雨  
 店先の梅の実赤し梅雨まぢか  
 青梅雨や変らず届くジャム嬉し  
 梅雨籠り褪せし写真に眺め入る  
 病床へ消防の音梅雨の夜  
 貞代 美佐子 敏江 泰子 徹雄

水明通信

かな女句の変容について

染谷風子

平成二十五年十一月、水明通巻千号を記念して水明発行所より『長谷川かな女全集』が刊行された。第一章は俳句、第二章は随筆でかな女の全作品を網羅した貴重な一冊である。私は令和二年に購入した。かな女の全句に目を通したが、その際第一の感想は、戦前と戦後の句に大きな違いがあることだった。戦前の『雨月』では、切字「や・

かな・けり」の使用比率が四割と高いが、戦後の句ではそれが二割程度に減少している。しかも、切れの箇所は下五末が多くなり、字余りの破調の句も増加している。この作風の変容の理由は何か。水明の方でこの理由をご存知の方がおられたならば是非ともその理由をお伺い致したく思います。

右かな女全集は、又随筆が滅法面白い。明治・大正・昭和の文学史・世相史を名文で綴っている。水明の新しい会員の方には、かな女の随筆の魅力を是非とも味わって頂きたい。

## 水明俳句会ホームページのご案内



■水明俳句会では、独自のホームページを運用して広報活動を行っています。会の紹介をはじめ、主宰句や会員の句を掲載し紹介をしています。

■過去の水明誌も読むことが出来ますので、是非ご活用ください。

■インターネット句会を毎月開催していて、現在40数名の参加で盛り上がりを見せています。

毎月20日の投句締め切り、25日迄の互選・選評を頂き、その結果を26日に公表しています。

現在水明会員の投句と外部投句が半々の状況です。水明会員の投句をもっともっと期待しております。

2句だけの投句です。どしどし参加をお願い致します。

**閲覧方法** : スマホで「水明俳句会」と検索すればホームページが表示されます。

<b>掲載内容</b> :	【トップページ】	今月の主宰句、水明の歴史と歴代主宰
	【主宰紹介・運営組織】	運営組織・句会案内 イベント案内
	【水明の掲載句】	雪欄作家の特別作品、 季音抄、水明抄
	【インターネット句会】	今月の清記、選句・ 選評の結果
	【コンテンツ】	過去の水明誌、入会 申込書、退会届



## 「りんどう忌」のご案内

【と き】 2023年9月29日（金曜日）12時受付

【ところ】 さいたま共済会館 501 / 502号室

【会 費】 2,000円（昼食はありません、飲み物は各自持参してください）

投句数および兼題、投句締切時刻、会費、申込書など申し込みの詳細については、次号9月号にてご案内申し上げます。

事業部

## 第7回「水明塾」のご案内

【と き】 2023年10月30日（月曜日）

午前の部（水明集作家対象）10:00～12:30（09:30受付）

午後の部（水明全誌友・同人・季音同人対象）14:00～16:00  
（13:30受付）

【ところ】 浦和駅東口パルコ10階第13集会室

申込み等の詳細については、10月号にてご案内いたします。

※午後の部は堀田季何講師を招聘しての講演会、午前の部は全句講評講座。

事業部

# 風 声

○現代俳句六月号——「現代俳句の風」欄

青淵の論語の里へ夏燕

井上燈女

白壁にワンポイントの守宮かな

岡田宣子

元氣出づ土用鰻と母の声

小駒さち子

「考える人」への応へ蟬時雨

近藤徹平

台風来眼圧徐徐に上がりをり

永野史代

草間彌生の水玉ゆるる街は初夏

野田静香

大南風帽子のひもを絞めなほす

宮崎チアキ

金魚下げ石堀小路を行く舞妓

田寺玲子

○現代俳句六月号——「現代俳句の風」秀句を採る」欄

山口彩子氏の感銘十句抄に

金魚下げ石堀小路を行く舞妓

田寺玲子

○くちら（中尾公彦主宰）六月号——「受贈俳誌美術館」欄

篁や春の眠りを誘ふ風

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）六月号——「受贈誌拝見」欄

人間が神を演ずる里神楽

鬼之介

○新月（松田碧霞代表）六月号——「現代俳句鑑賞」欄

州浜ゆき氏の鑑賞により

俳誌「水明」四月号「笑ふ不動」より

天平の御代を思うて蓬摘む

山本鬼之介

「天平の時代」とは、奈良時代でも特に天平文化の栄えた七二九年から七四九年までの聖武天皇の治世を指す。遣

唐使や仏教等の大陸文化の流入、全国に国分寺・国分尼寺が配置され、鎮護国家の象徴として東大寺大仏が建立された。

掲句は、野面へ散策を促すような麗らかな日差しに「君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ」と民を思ふ天皇の一首を口遊みたくなるような趣がある。

ひな祭りの蓬餅にと、奥様と蓬摘みをされたのかも知れず。天平文化は最も華やかな色彩と言われる。ほんのりとした蓬の若葉から天平の世へ思いを馳せられたのである。当然ながら、昨今のきな臭くなる日本を取り巻く情勢や温暖化による天候異変が行間に込められている。

○新月（松田碧霞代表）六月号——「受贈俳誌紹介」欄  
破顔せる不動明王春の夢  
鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）六月号——「受贈誌御礼」欄  
胴上げの着地を飾るいぬふぐり  
鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）六月号——「諸家近詠」欄  
寶頭盧に溜まる暇なき春埃  
鬼之介

○笹（山本一步主宰）——「受贈誌の一句」欄  
冬深いよよ火の入る登り窓  
越田栄子

（日高道を抄出）

# 水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和五年六月三十日現在 —

波多野寿子	10	口	加藤でん治	1	口
森本早苗	10	口	河野はるみ	1	口
笹本啓子	5	口	越田栄子	2	口
全国大会より			小林京子	1	口
荒井俱子	2	口	五明昇	3	口
石井喜恵	2	口	笹本啓子	1	口
石川理恵	2	口	飯室夏江	3	口
石関六弦	1	口	下川光子	1	口
石田慶子	1	口	霜多光代	2	口
石山かつ子	3	口	染谷風子	5	口
梅澤佐江	2	口	反町修	2	口
梅澤輝翠	2	口	西幅公子	2	口
大塚茂子	2	口	野田静香	2	口
大場順子	2	口	日高道を	5	口
大村節代	3	口	福田千春	5	口
岡田宣子	1	口	保坂翔太	1	口
緒方みき子	3	口	星野和葉	2	口

## 通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

〔指導者〕 網野月を

〔作品〕 5 句 〔受講料〕 1、000円

〔方法〕 ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記

③84円切手同封 ④返信用封筒は不要

⑤締切なしで随時受付

〔送付先〕

網野 月を 電話080-7580-0208  
〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

曲淵徹雄	2	口	元田亮一	10	口
正木萬蝶	2	口	本橋稀香	1	口
松井由紀子	10	口	森川義子	2	口
松本光子	2	口	矢作水尾	2	口
丸山マシミ	2	口	山田美佐尾	5	口
茂木和子	2	口	田中章嘉	5	口
			— 合計135口 —		

# 後記

暑中御見舞申し上げます。

水明創刊九〇周年・通巻千百号、鳥羽谷通巻二百号等を記念して行なわれた若狭句碑めぐりツアー、そして全国大会と今年の二大イベントが無事に終わりました。

その折には、暑いとか、雨は大丈夫かと言っていました。今の暑さから思うと夢のようです。

七月二十九日、三十日、三十一日夏行が「浦和バルコ」で行なわれます。其の昔の夏行は、バルコも無かったので、クーラーの無かった発行所で、夕方から行なっていました。当時は、いやあ三十度を超える暑さで大変だとか言い合いましたが、今や四十度に迫ろうとしています。

先日までは電力不足なので節約をと指導されていたのが、がらりと

と変って、命に係わる暑さなので夜もクーラーを点けてとアナウンサーされています。

それほどの猛暑なのでですね。そして環境省から「熱中症特別警戒アラート」が発表されています。

来年度からは、自治体等も協同でクーリングシエルトを設けると言う計画のようです。外出の折に、暑さでふらふらになった時の駆込寺だそうです。良い案ですが、果して何箇所出来るのでしょうか。

因みに、25℃を超えた日を夏日、30℃を超えた日を真夏日、35℃を超えた日を猛暑日、40℃以上は酷暑日、夜間の最低気温が30℃以上は超熱帯夜とか。その上、大雨の被害もかつてないほどです。

水明会員の皆様もクーラーをどンドン使って、猛暑を乗り切られます様に、どうぞお気をつけて！

(節代)

今月のはてな？

- 翠巒 (すいらん)
- 蠅螟 (しようめい)
- 颯 (ひかがみ)
- 擬 (もと) き
- 琅玕 (ろうかん)
- 追熟 (ついじゅく)
- 旨寝 (うまい)
- 鉄漿 (おはぐろ)
- 玉響 (たまゆら)
- 弄 (いじ) られて
- 矩差 (かねさし)

## 水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内をお願いします。)

頁 5 7 17 18 19 21 26 27 44 45

# 水明

令和五年八月号

通巻一一一五号

令和五年八月一日発行

## 発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

## ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

## 発行人

山本鬼之介

## 印刷所

中央美版















## 季音抄

山本鬼之介

神の宮亭々として夏木立  
青とかげ再生の尾の寸足らず  
郭公啼くや伏し目がちなるマリア像  
明滅はワルツのリズム恋螢  
山鳩の声透き通る夏至のひる  
短夜やガーネット色の足の爪  
相傘のしばし佇む濃紫陽花  
石塀に太古の影を曳く守宮  
つばめ魚遠流の鳥を恋ひて飛び  
袈裟がけに来る夕立の早さかな  
黒南風や鮮やかな黄の勝負服  
夏の雨手心といふ謀  
夏めくやモディリアーニの長き首  
萍をまとひ田舟の押し出せり  
煙突の送りの煙百日紅  
静かなり終の住処の深緑  
月夜には月夜のかをり南風  
飛魚はね似たやうな雲湧いて跳ね

波多野寿子  
星野和葉  
茂木和子  
森本早苗  
矢作水尾  
山中みどり  
松井由紀子  
大場順子  
梅澤佐江  
井上燈女  
内田恵子  
町野広子  
檜鼻ことは  
笹本啓子  
青木鶴城  
日高道を  
河野はるみ  
石田慶子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

藁の火を煽るはちきん初鱈  
 本籍はダムの底なり虹かかる  
 万緑に紛るる少女その声も  
 芍薬やだらりの帯の凜と行く  
 ふと声を聞きたき人や朧月  
 あくる日の香り冷たき筍飯  
 柿若葉つい一枚を噛んでみる  
 妻には内緒レモンの花に黒揚羽  
 むさしのの比企の郡の四葩かな  
 状差しに亡き人の文五月闇  
 初夏やインド更紗の染め香る  
 五月雨の匂なつかし石畳  
 ナイターや野球音痴も肩を組み  
 弁当は筍飯や道普請  
 五月雨や景德鎮の深き碧  
 万緑や牧の牛舎にいま誕生  
 飛魚の空中散歩青き空  
 婿殿の手捌きあつぱれ初松魚

菅原卓郎  
 梅澤輝翠  
 菅原真理  
 岡田宣子  
 越田栄子  
 新 曆文  
 清水桂子  
 森下山菜  
 小林京子  
 阿部幸代  
 丸屋詠子  
 元田亮一  
 篠崎紀子  
 皆川更穂  
 池田珪子  
 西幅公子  
 反町 修  
 山岸久美子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中美どり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和五年八月一日発行 毎月一日発行

(第九十六卷 第八号)

定価 一〇〇〇円